2024年度

地域の課題解決事業
成果報告書

「高度人材育成」「地域活性化」をオール大分で取り組む
Oita Regional Cooperation Platform
おおいた地域連携プラットフォーム

おおいた地域連携プラットフォームは、
産学官が協働（オール大分）で
大分県の人的資産（地域資産）の最大化と
有効活用を図ります。

目　次

1　ごあいさつ
2　2024年度実施事業一覧
7　フィールドワークを通じての地域課題解決事業（フィールドワーク支援事業）の成果
28　大分県と県内高等教育機関の連携による地域課題解決事業の成果
31　県内市町村と県内高等教育機関の連携による地域課題解決事業の成果
34　県内企業等と県内高等教育機関の連携による地域課題解決事業の成果
39　フィールドワーク支援事業のひとこま
40　フィールドワーク支援事業　参加学生等アンケート
42　2024年度地域の課題解決事業成果報告会
44　県内大学・短期大学等一覧

ごあいさつ

おおいた地域連携プラットフォーム
事業推進本部長
国立大学法人大分大学理事
大分大学地域連携プラットフォーム推進機構長
廣瀬　祐宏

おおいた地域連携プラットフォームは、大分大学が中心となって、大分県内の高等教育機関、産業界、自治体等の各機関が協働・連携し、地方創生の恒常的な議論の場を設置するとともに、それぞれの特色と強みを活かし地域ニーズを踏まえた高度人材育成や地域活性化のための事業等にオール大分で取り組んでいます。地域で少子高齢化・人口減少が進む中、高等教育機関が主導して、若者の定着や地域における課題解決、イノベーション創出を通じた地方創生を目指して活動しています。

この報告書は、2024年度中に地域の課題解決事業として取り組んだ成果を取りまとめたものです。教員の指導のもと学生がフィールドワークを通じて主体的に地域課題解決に取り組む「フィールドワーク支援事業」21件、「大分県、県内市町村、企業等と高等教育機関の連携による地域課題解決事業」11件を紹介しています。

「フィールドワーク支援事業」では、県内7つの高等教育機関から300名を超える学生が参加し、県内の様々な地域に出向き、地域の実情を知るとともに、課題解決に向けての探索や活動を行いました。地域の課題解決に向けて、学生が企画・実践することで、「おおいた」に対する興味関心を持ち、郷土を愛する気持ちが醸成され、学生が地域で行動できる人材として育っていくことが期待されます。学生と地域との交流が課題解決への一歩になることを願っています。

また、多様な地域課題に対応するため、大分県や県内市町村が実施主体となり、「地(知)の拠点」として大学等が持つ研究機能やシンクタンク機能を生かして、県内高等教育機関や企業等の連携による地域課題解決事業に取り組んだところです。県内8つの高等教育機関が参画しました。

本プラットフォームはこれらの事業の他にも、県内就職促進のための「おおいた共創士」認証、「シゴト発見フェスタ」等就職イベントの実施、地域人材創出インターンシップなどの活動に取り組んでいます。さらに、昨年度、大分大学が申請して文部科学省より採択を受けた「地域ニーズに応える産学官連携を通じたリカレント教育プラットフォーム構築支援事業」について、今年度も引き続き採択を受け、大分県内のリカレント教育の促進に取り組んでいます。

2024年度地域の課題解決事業の実施にあたり、ご協力、ご支援いただいた地域の皆様、関係者の皆様に心より御礼申し上げるとともに、引き続きのご理解、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2024年度 実施事業一覧

フィールドワークを通じての地域課題解決事業（フィールドワーク支援事業）

大学等の教員が企画し、学生と共に地域に直接出向き、地域課題等の解決を図る事業活動を通じて学生が地域課題に気づくこと、課題解決を図ることで地域に貢献すること、学生との交流を通じて地域が活性化すること、また、学生の地域への愛着を深めることをねらいとしています。

県内各地域においてバランスよく活動が展開されるよう、大分市・別府市以外の地域を対象とした「地域枠」（No.1～10）と大分市・別府市を含む県内全域を対象とした「自由枠」（No.11～21）を設けています。

No.	大学名	代表者	事業名	実施地域	頁
1	大分大学	教育学部 教授 市原 靖士	地域連携によるSTEAM教育ワークショップと指導者の育成	日出町 国東市	7
2	大分大学	医学部 教授 石井 まこと	地域の生活・仕事創造から学ぶ地域つなぎプロジェクト	佐伯市	8
3	大分大学	医学部 講師 芋 松平	小藤田焼の里における地域活性化プロジェクト	日田市 （皇隼町、小藤田焼の里）	9
4	大分大学	医学部 教授 渡邊 博子	佐伯市大入島イノベーションプロジェクト ～地域活性化のアイデア創出とその実践に向けて～	佐伯市 （大入島）	10
5	日本文理大学	工学部 准教授 江越 充	竹原城下町 夜間景観向上ワークショップ	竹原市 （城下町エリア）	11
6	日本文理大学	工学部 助教 横田 健	外国人住民との共生社会実現に向けたモノづくり・コトづくりプロジェクト	豊後大野市 （大野町）	12
7	別府大学	食物栄養科学部 教授 陶山 明子	梨の葉を利用したお茶の製造	由布市	13
8	大分県立芸術文化短期大学	国際総合学科 講師 秋庭 淳志	中津市本耶馬渓地域の放置果樹に係る課題解決に向けた体験型サービスの開発	中津市 （本耶馬渓地域）	14

No.	大学名	代表者	事業名	実施地域	頁
9	別府溝部学園短期大学	食物栄養学科 教授 牧 眞生	オリーブ栽培農家の6次産業化をめざして ～オリーブ不良果実を利用した商品の開発～	国東市	15
10	別府溝部学園短期大学	食物栄養学科 特任准教授 安達 美和子	本耶馬渓の観光推進事業（温泉・観光・食） 道の駅「耶馬トピア」周辺の観光化の可能性と集客力アップを探るフィールドワーク支援事業	中津市 （本耶馬渓地区）	16
11	大分大学	医学部 教授 加藤 哲也	被災地域住民の防災やコミュニティに対する意識の変化と健康状態の調査	由布市 （湯平）	17
12	大分大学	教育学部 准教授 川田 栗樹子	湯治ぐらし×家庭科：ゆたかな衣食住を通じたwell-being向上プロジェクト	別府市 （別府温泉郷地区）	18
13	大分大学	経済学部 准教授 三好 禎之	ノルディック・ウォークを用いた健康寿命の延伸と地域の担い手づくり事業	大分市 （鶴崎・稙田・三佐地区） 別府市 （浜脇地区）	19
14	大分大学	医学部 講師 朝美 澄子	大分県内（別府市）災害時における外国人対応について、避難および避難所に関する必要な実態の聞き取り、防災マップ作り（避難用語・避難所に使用できる使い方の検証）	別府市	20
15	大分大学	医学部 教授 三重野 英子	大学生語学応援サポーターによる共生社会実現プロジェクト	由布市 （大分市、別府市、豊後高田市）	21
16	大分大学	理工学部 講師 江藤 真由美	別府鉄輪地区にて生産される「湯の花」の地球化学的現地調査	別府市 （鉄輪地区）	22
17	大分大学	理工学部 助教 真川 純夫	地域活性化に向けたオープンデータを活用する「まちあるきアプリ」の作成	大分市 （中央区～千代田区）	23
18	別府大学	国際経営学部 講師 小野 貴史	文化財保存・継承と観光活用プロジェクト ～戦後80年に向けたピースツーリズム～	中津市・国東市・杵築市・別府市・大分市・豊後大野市（緒方地区）・臼杵市・竹田市・豊後高田市	24

No.	大学名	代表者	事業名	実施地域	頁
19	別府大学	文学部 教授　渡辺 智恵美	地域文化財と大学博物館を活用した人材育成 ～小学生を中心とした地域の歴史探訪と体験教育を通して～	別府市	25
20	別府大学 短期大学部	食物栄養科 准教授　辰野 香奈	～がんサバイバーの"食べたい"を叶えるメニュー提案～ Cocoro Support Project	別府市 日出町	26
21	立命館アジア 太平洋大学	サステイナビリティ観光学部 教授　須藤 智徳	亀川商店街再活性化計画策定事業（Ⅳ）	別府市 （亀川商店街）	27

大分県、県内市町村、企業等と県内高等教育機関の連携による地域課題解決事業

大分県、県内市町村、企業等との連携により、「地（知）の拠点」としての大学等（大学、短大、高専）が持つ研究開発機能やシンクタンク機能を活用し、教育や産業振興、医療・福祉の充実、地域活性化など多様な地域課題に対応する事業です。

大分県と県内高等教育機関の連携による地域課題解決事業

No.	大学名	代表者	事業名	実施地域	頁
22	立命館アジア 太平洋大学	サステイナビリティ観光学部 教授 メイルマノフ・セリック 国際経営学部 教授　藤本 貴士	eスポーツを活用した「通いの場」の魅力向上事業	大分県	28
23	大分大学	医学部 助教　平野 直樹 講師　後藤 奈穂	小児慢性特定疾病児童等の成人移行支援	大分県	29
24	大分工業高等 専門学校	一般科 准教授 Tomek Ziemba	外国語対応ガイド等観光産業人材の養成	大分県	30

県内市町村と県内高等教育機関の連携による地域課題解決事業

No.	市町村名	大学等名	代表者	事業概要	頁
25	大分市	大分大学	経営マネジメント機構 産学官連携推進センター 准教授　小川 健一	若手起業家育成事業で実施するアンケート調査結果や今後の方向性等に関する助言等の支援	–
26	別府市	別府大学	文学部 教授　長澤 秀吉	別府市アール・ブリュットの芽ばえ展（障がい者の芸術活動）を通じた障がいのない人の共生社会構築への理解促進 ・開催期間中に、障がい者が制作した絵画・工芸・書・切り絵などのアート作品を展示 ・同じ会場内において、絵画作品などについて審査を行い、講評を行うとともに、講評中、作者が来場者と交流して意見を伺いました	–
27	中津市	大分県立芸術 文化短期大学	国際総合学科 講師　牧園 淳也	放置果樹の活用 ・人口減少の地域課題が深刻化により果樹の放置が目立ち始めている中津高原地区において、農家に代わりその果樹を地域ぐるみで収穫できるようにし、観光人口増加につなげる	–

No.	市町村名	大学等名	代表者	事業概要	頁
28	中津市	大分県立芸術文化短期大学	国際総合学科 講師　牧屋　淳也	地元就職に向けた説明・説明会等の企画 ・地域社会貢献活動を通じて、より多くの学生が自ら学ぶように、市内企業を説明し、企業の魅力を伝えます。	–
29	中津市	筑紫女学園大学・短期大学部	筑紫女学園大学 准教授　安達 美和子（観光・法学） 准教授　江島　海子（食）	青の洞門周辺を基軸とした本耶馬渓の観光振興 ・中津市耶馬渓地域の「青の洞門」を基軸として、地域資源の発掘・磨き上げ等を通じ、地域観光の魅力向上を図るため、青い空と青の洞門周辺の魅力の魅力を発見し、より高いレベルに取り組むことで、本耶馬渓の観光及び観光資源の情報について発信する。	31
		日本文理大学	工学部 教　授　吉村　充功		–
30	竹田市	別府大学・短期大学部	総務教育科 准教授　大田　佳紀	小中学校の英語教育支援 ・小中学校の英語教育の向上研究における協働	–
31	竹田市	大分大学	教育学部 准教授　村上　佑介	ブロンズ像メンテナンス技術習得 ・メンテナンス技術をもった人材を市内で育成し、技術を持った人が継続して保守・管理していける仕組みをつくるため、事業者向け研修会を実施 ・市民参加で清掃と調査を行わせる会の開催	32
32	杵築市	別府大学	文学部 准教授　福西　大輔	杵築市の民俗総合調査の実施と地域計画への活用 ・市内各小学校所在地域に対応した市内小学校・小規模校区の地域文化調査を実施 ・調査地域の概況書を作成するとともに、学生による調査内容の市内広報活動を実施	–
33	宇佐市	別府大学	国際観光学部 教　授　高木　正史	地域コミュニティ協議会の自主財源確保支援 ・長期滞在に伴う課題に対する解決策として「空き家活用」を行っているが、空き家の活用・発掘的な提案のための自主財源の確保に向けた取組として、調査を実施	–
34	宇佐市	おおいた地域連携プラットフォーム	コーディネーター 和田　智雄	移住定住動画作成プログラム事業 ・移住定住動画作成の動画ドラマ用、動画コンテンツを学生の授業の時間を使って作成	33
35	豊後大野市	日本文理大学	保健医療学部 准教授　小野寺 博和	地域の竹林整備と竹活用事業のさらなる自主財源の確保に向けて ※「企業と農村連携活動推進事業」の連携による地域課題解決事業により実施	34
36	由布市	大分大学	医学部保健学科総合センター 准教授　小川　雄一 総合学部 准教授　林　　美樹	ゴミの減量 ・生活ゴミ等排出から排出される可燃ごみを減少させるため、ゴミ減量意識の醸成を図るための啓発を強化しつつ、市内の事業所はゴミの種類分けについての分別をさらに徹底する実施	–
37	国東市	大分大学	医学部 講　師　猪俣　理恵（作業療法学） 講　師　後藤　奈穂（地域看護学）	プレコンセプションケア健診の普及啓発 ・自治体が進めを通じて、年間プレコンセプションケアの必要性を市内関係者（医療・教育・ハローワーク・保健センター等）に周知を図り、プラン作成等に関する「チェックリスト」の活用を行うとともに、大学におけるデータを集計するとともに、学生との意見交換を実施	–
38	国東市	別府大学	国際観光学部 教　授　阿部　博光	職員や市民に対するSDGsの普及啓発 ・SDGsの理解度を学生がアンケートの調査・集計	–

No.	市町村名	大学等名	代表者	事業概要	頁
39	日出町	別府大学 短期大学部	食物栄養科 教授　岩本　昭	**自然薯を活用した特産品の開発** ・日出町大神地区の自然薯である自然薯の栽培法の開発、大神地区を始発点とする薯の新しの作成、市民参加の地域活性化モデルの構築	–
40	九重町	日本文理大学	経営経済学部 教授　山内　勝義 准教授　小久保 雄介 助　教　阿部 裕香理	**九重町特産品の開発・販路開拓** ・ここのえ「夢」プラント構造事業を推進するための伝統芸・文化芸に学ぶ ・ブランド化する商品の開発方法や展開・販路開拓手法や販売戦略について助言・講演	–
41	九重町	大分大学	福祉健康科学部 准教授　都田　法子	**未就学児の保護者への心理的サポート** ・未就学児の増加に伴い、多忙な日々の中で、保護者からの手助けを受けることが難しくなっているため、こどもの発達と家庭保育の子どもの育ちを支援するとともに、未就学児の保護者から保育ケアに関するような相談会を開催	–
		別府大学	文学部 教　授　矢島　祐平		–
42	九重町	日本文理大学	経営経済学部 講　師　藤　亜光	**インバウンド客の受け入れに関するノウハウ（文化面・言語面）の共有** ・町内の観光施設（温泉・景観等）を訪れるインバウンド客の対応において、文化的・言語的障壁の壁による トラブルが生じないよう、事前に対応する受入体制の整備を進めるにあたって、海外のノウハウ（文化面・言語面）に関する講演及び情報の共有	–
		別府大学	国際経営学部 教　授　鈴木　晶		–

県内企業等と県内高等教育機関の連携による地域課題解決事業

No.	大学等名	代表者	事業名	連携企業等	頁
43	日本文理大学	経営経済学部 准教授　小野寺 博和	地域の竹林整備と竹活用事業のさらなる自主財源の確保に向けて	ながたに振興協議会	34
44	大分大学	大分大学 教育マネジメント機構 STEAM教育推進センター 教　授　竹中 真由子	学校外における教育活動への参加の機会に対する地域格差の解消と教育力向上を目指したメタバース活用事業	株式会社OK	35
45	大分工業高等専門学校	一般科 准教授　森田　晶泰	廃棄未利用食材資源を用いた新規調味料開発	株式会社タカフジ	36
46	別府大学	国際経営学部 講　師　小野　貴史	新湯治・ウェルネスツーリズム推進に係る若年層への波及について	別府市観光協会	37
47	別府溝部学園短期大学	食物栄養学科 教　授　牧　晶生	オリーブオイル搾油残渣の資源としての有効活用	imaアグリサービス	38

地域連携によるSTEAM教育ワークショップと指導者の育成

大分大学／教育学部　教授　市原　靖士

令和6年度地域の課題解決事業成果報告

地域連携によるSTEAM教育ワークショップと指導者の育成

大分大学　教育学部 市原靖士

本事業の目的

•STEAM教育の指導ができる教育の人材育成とSTEAM教育に関連するワークショップを誰かでも参加できるよう場の提供を行うことである。大分県内全ての小学校の教育の充実としてSTEAM教育の需要は増しており、それらの教育を受けた研究人材が社会に求められる状況にある。大都市部では、このようなSTEAM教育に関するワークショップや教材などさまざまな機会で指導者も多く、場の提供があり子どもたちもSTEAM教育を学ぶことができる状況にある。•しかしながら、大分県では、そのような場の提供がほとんどなく子どもたちはなかなかSTEAM教育を学ぶ状況にない。また、学校教育においてもSTEAM教育の導入が様子に進んでは居るが、大分県では、ほとんど進んでいない状況である。このことの要因としては、教育過程未大学での教育においてSTEAM教育の指導法を学ぶ機会がなかったためである。そこで、本事業においてSTEAM教育に関するワークショップを構想、企画、場の実践を通してSTEAM教育を指導できる教育養成、人材育成をすることとSTEAM教育に関するワークショップを開催し子どもたちに場の提供をすることと考えた。

対象学年及び人数

大学生（指導者育成）

•教育　2年生　7名
3年生　8名　4年生　6名

•語義教諭生　2年生　8名
3年生　5名　4年生　4名

合計　38名

実施学生に対する指導

•プロジェクト課題に関連しての指導

•ブレーンストーミング

•教材研究コーナー

•模擬指導者としてワークショップ開催

•実践授業

開催した主なワークショップ

[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]

地域の生活・仕事創造から学ぶ地域つなぎプロジェクト

大分大学／経済学部　教授　石井　まこと

事業名：地域の生活・仕事創造から学ぶ地域つなぎプロジェクト
事業者：大分大学・教授・石井まこと　連携企業：株式会社コーキンコーポレーション　活動地域：臼杵市

1　事業の目的と概要：地方圏に入りこみ生活と仕事を知る

地方圏の課題として、人口減少が進み若者も少なく、空洞が続かしている。こうした状況を変えていくには、地方圏の自然、文化、産業を人的つながりで新しい仕事や仕事（なりわい）を生み出す活動が求められる。そこで教育者である学生たちに、臼杵市内に出向き、自ら労働・生活をデザインしている人々へのインタビューを通じて、人口減少や地域経済の衰退といった地域課題の表層とは異なる生活・仕事のつながりの構造や力学（地図：山裾の経済）を洞察してもらう。実際に訪して、臼杵市をフィールドに仕事を創り出す人をつなげているコーキンコーポレーション・浜野さんに協力してもらい、大学生が地域づくりをリアルに考えていく事業を実施した。手法としては、大分大学経済学部で実践しているアイデアソン授業を活用しプランだけでなく社会実践まで実施した。

2　事業活動と効果

（1）事業の展開：臼杵市でのアイデアソンによる地域おこし事業

本事業の流れは下図の通り、①「キーノート」→②「インタビュー」→③「アイデア創出」→④「社会実践」とする。

まず事前講座として、①「キーノート」として生人目線でみた地域の課題と実践を臼杵市の講師を大分市内で実施した。

次に、その上で生人が一地域で生業（なりわい）を創造する事業者（プレイヤー）たちへの②「インタビュー」を企画した。「なぜ臼杵なのか」「なぜこの事業なのか」それぞれの事業者の熱いに迫った質問を6つのグループで実施した。その上で地域の象徴所である臼杵市内「住吉商店」を貸し切り1泊2日の③「アイデア創出」合宿（8月3・6日）を行った。ここで生まれたアイデアから学生が最新やってみたいと思う事業を④「社会実践」として、学生と地域の人が対面を通じてコミュニケーションをする「分け合いクーポン」、市の文化財「旅の市」を使って地域の方を学生がおもてなしする「1日商家こころのこ（おい）」の3事業を実施することにした。

（2）事業の効果：地域をリアルに洞察する経験と地域への貢献

今回の成果は実践していると言える地域をリアルに学生たちが体験し、その実践可能性を体験できたことである。合宿研修で生まれたアイデアのうち3つは学生主体で地域の人と一緒に企画・運営・収益管理を行い、事業実践がかなったことである。

また、今回の協力者である事業者たちにとっても、学生が現場に来て、一緒に事業に参加することができることの意義を感じてもらえた。合宿中には地域住民も来入、語り合うことで、自分たちの事業や語りが地域に繋がっていることも実感してもらえ、地域の人々の自己肯定感を高めた事業にもなり、参加者すべてが成果を実感した事業になった。

事業の効果：地域をリアルに実感し、地域へ貢献（アンケート回答より）

1. 学生のリアルな地域体験：インタビューの効果
「地域の人たちが、どのような取組をしているか分かった」

2. 成果を実感する取組：学生と地域が協力した交流事業の実施
「地域で起こっている問題の根本を理解して解決策をおさせた」

3. 地域で生みを開き人々の満足感：自己肯定感の向上
「自分に有益いアイデアばかり、頑張らないといけないなと」

小鹿田焼の里地域活性化プロジェクト

大分大学　経済学部　経営システム学科
子 ゼミ

背景・目的

大分県日田市北部の「小鹿田焼の里」は、約300年の歴史を持つ伝統的な焼き物の産地です。川の流れを利用した「唐臼（からうす）」や、機械を使わない手作業による制作が特徴で、一子相伝で技術が受け継がれてきました。しかし近年、後継者不足や販路拡大が課題となっています。本プロジェクトでは、「伝統」と「革新」をテーマに、現地での調査を実施。5年ぶりに開催される「民陶祭」に参加し、来場者へのインタビューを通じて消費者視点での魅力や改善点を探りました。また、職人へのヒアリングを行い、技術継承や販路拡大の実情を把握。こうした調査を基に、小鹿田焼の持続可能な発展に向けた観光や地域の魅力発信のアイデアを提案することを目的としました。

体制

【指導者】
大分大学 経済学部 経営システム学科
・教授　子 松平
【連携先】
大分大学 経済学部
経営システム学科 子ゼミ
【活動地域】
大分県 日田市 源栄町 皿山(小鹿田焼の里)
【参加学生】
10名（学部3年：10名）

フィールドワーク

インタビュー調査と写真・映像収集
「小鹿田焼の里」にて
2024年10月12日午前10時～午後5時にかけて民陶祭来場者にインタビューを実施
インタビュー項目は以下の通り
・小鹿田焼を購入した理由
・日常で小鹿田焼を使用する場面について
・小鹿田焼のどのような点に価値を感じるか
・小鹿田焼の歴史を守るために必要なこと等

職人へのインタビュー
2024年11月27日　15時から18時にかけて小鹿田焼の里にて、小袋直明窯、坂本浩二窯、坂本工窯を訪問
坂本工さん、坂本浩二さん、坂本拓磨さん、小袋直明さん、小袋春梓さんへ
インタビューを実施
・小鹿田が抱える課題
・新しい取り組み
・仕事の中での困りごと
・歴史を守るうえで困難なこと等

活動記録

2024年10月12日～
民陶祭～

日田市小鹿田焼の里で行われた
民陶祭で来場者へインタビュー

2024年11月27日～
職人へインタビュー

実際に職人さんへインタビュー
（小袋直明さんの工房にて）

2025年1月～
大学祭等での展示

大学の祭等での展示や
動画作成を行った

成果および課題

来場者アンケートの成果
・焼き物は日常での使用が大多数を占める・小鹿田焼の歴史を守るためには SNS やマスメディア等で一度につく機会を増やす意見が多かった。小鹿田焼の価値は伝統的な技術や文化、実用的な日用品として価値を感じている人が多い。

職人インタビューの成果
・原材料の入手困難性（コメ農家の機械化によって藁料の藁が入手困難）
・行政との関係（意匠文化的著観）等による規制によって柔軟に環境の変化に対応できない。

佐伯市大入島イノベーションプロジェクト
～地域活性化のアイデア創出とその実践に向けて～

大分大学／経済学部　教授　渡邊　博子

2024
おおいた地域連携プラットフォーム
フィールドワーク支援事業

大入島の民泊活動者サロンのメンバーと

ワクワク
元気に！

佐伯市大入島
イノベーションプロジェクト
～地域活性化のアイデア創出とその実践に向けて～

大入島（佐伯市）人口 500 人超過疎の島を訪ねて、やってみる会 代表

【1】きっかけ

大学院生で「大入島を子育ての『ちょうどいい』の町にできるか？」を考える小倉貴宏コーディネーターからの話し。

島のくらしが多様で豊かで、高齢者も様の暮らす地域でもあるから

地の利やつながりを、加工品づくり品、新しくその価値を作ろう

そのうえでどう取り入れ、島に人が来てくれるようにするか

大学院でいい
新しい人が来る島にしたい

【2】私たちは考えました！（提案）

（1）高齢者からも元気になってもらいたい
そのためには ↓

やりがいづくり（仕事や事業、活動する場の創出）

（2）普通な地域資源がもっと活かされてほしい
そのためには ↓

組み合わせ方の工夫、「結び」に価値をつくるシステム

（3）祭りなどに若い人たちが参加してほしい
そのためには ↓

島内外の多様なネットワークの創出

【3】方法

地域イノベーション事例で学んだ手法（視察の実施）、考え、アイデアを生み出し、試行、評価、アイデアを見直す、ウラにブラッシュアップするなど、実践に向けての準備をしました。

★事前の準備・お伺い★

佐伯市のステーションを島内に作り
コミュニティリーダーとつながりの参加

★説明・意見交換★

★視察の実施、意見交換★

★アイデア出し★

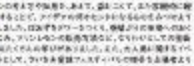
【4】活動報告

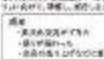
アイデアを出し合う話していくなかで、私たちは、次の3つのアイデアを、まず試行しました。試行後は、成果と課題についても意見を出しあいました。

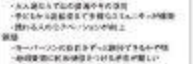
試行①成果（やりがいを保ける）

試行②ダイバーズカフェ訪問

試行③なりわい・新しい観光







【5】今後の展開

島語の編集は、沖縄後や知識集の編集、移動手段の確保、なりわいやイベントのうまくな実践の進し方
それらの解決のため、コンテンツ（内容）の充実、ネットワークづくり、手軽なモビリティの導入など、できるところから始める

大分大学経済学部・大学院経済学研究科　渡邊ゼミ　　2024 年度

事業の様子や動画もページ上部のQRコードからご覧になれます

NBU 日本文理大学

杵築城下町 夜間景観向上ワークショップ

[illegible]

地域住民と観光客が行き交う夜間景観を目指して

城の通と呼ばれる杵築の城下町は、観光客の来訪時間が短い、宿泊客が少ないという課題が挙げられ、夜のアクティビティの創出が求められています。加えて、坂を中心とした歩行路には時差があく、夜間の通行の安全性への懸念が指摘されています。

このような背景を受けて本事業は、住民や観光に訪れた人が夜間も安全に　楽しんで歩行でき、かつ城下町をそぞろ歩きしたくなる夜間景観を創出することを目的としています。省エネや先端にも配慮した新しい夜間景観のあり方について、地域とともに考えるワークショップを実施しました。

魅力的な夜間景観の検討と実践（光のイベント「観月祭」への出展）

人の心を惹きつける夜間景観について考え、それを実践する場として、毎年10月に行われる「観月祭」に出展させていただきました。城下町の魅力を分に伝える「中根図」をお借りし、光のアートの展示を行いました。

提灯や窓からの漏れる光による人を惹きつける効果を確認し、光のライトアップや水に反射する光の魅力について、インスタレーションを通して学生が来場者とともに体験する機会となりました。来場者にはヒアリングを行い、その印象の確認や改善点のご意見をいただきました。

安全・安心かつ魅力的な街路照明の検討と実践（街路照明実験・成果報告会）

昨年からの活動を通して得た知識や経験を活かし、新たな街路照明案についての提案を行いました。照明の方式や配置、光の強さなどについて検討を行い、学内で実験を重ね、最終案をまとめていきました。最後に地域へのフィードバックとして、現地で市職員や地域住民の方々に見ていただく成果報告会を実施しました。

ビフォー（現状一覧）とアフター（改善案）の照明環境を実際に見ていただき、参加者からは改善案に納得をいただくことができました。学生にとっては達成感と学びが得られる大変貴重な機会となり、杵築城下町の街路照明の改善に向けた新たなステップにつながる活動となりました。

外国人住民との共生社会実現に向けた モノづくり・コトづくりプロジェクト

■背景

- 2019年：朝鮮民主主義人民共和国（以下DPRK）の現状（参考）最近大都市：40年以上前（農業、工業）
- 各産業者が個別に動きしており、協力実施なし不明
- 現在地域事業：これまでの地域事業とは異なり地域特性
- **共時的な共生社会とは？？**
  - 外国人住民の地域社会に対して、何事を行っている
  - 地域社会がどのように地域や社会と生活している

課題
<①居住環境の整備>　<②地域住民との交流>

■目的

- 外国人住民と地域住民の交流を促進するための機会を創出
- **交流の意味**　＝外国人住民の居住環境の改善

モノづくり
・イベント会場となる場の設立等

＋

コトづくり
・イベントの企画・運営
・準備（アンケート調査、地域住民と協力）

■実施体制

<企業地域>
最近大都市大都市

<連携先>
食品大都市
国立大都市協会
(原地域)・食品大都市協会(原地域)
社会福祉法人
(地域)

→ 連携 ←

日本文理大学
工学部建築学科

<地域特性>
2年生：20名
4年生：13名

<連携内容>
2年生：協議上
地域型・活動地
地域型・活動地
活動・福祉場

■事業実施経過・実施内容

7月

R6.7.5 キックオフミーティング

<概要>
- 事業大都市の国際交流協会の取り組みと水上DPRK関係者の実施についての説明を受けた
- **外国人大学生の日本における地域への生活を学び、学んだ**

<成果>
- 今後の活動に向けて、学べることと学んだ知識の共有を行った
- 実習時には学生が自分でインタビューを行うなど、外国人住民の居住環境に対する思いが深まったとの声あり

8月

R6.8.23 国際交流イベント①生け花教室

<概要>
- 外国人居住者が多くお住の中で学習を行っているとの検討から、日本文化を体験することに
- 当日は、指導者との連絡の他、講師の指導員4名を中心として**学生が主体**に行った
- 当日の外国人住民の参加者は多数であり、22名の日本人学生がおのおのお手伝いのサポート（会場設営、進行等）を行った。
- 当日の参加者に対しては、外国人住民に対し、**日本での暮らしに関するアンケート調査**を行った

<成果>
- 当日の参加者の意見に対して、事業計画の設定内容や量などの検証にも繋がり大いに活用した
- **アンケートは、その後のイベント企画や交流場所の設計等に活用した**

9月

10月

11月

R6.11.4 国際交流イベント②ボードゲーム ＆ シェアハウス設計 中間発表

<国際交流イベントチーム（2年生8名）>

<概要>
- R6.10月から、新たな国際交流イベントの可能性を模索した
- シェアハウスでも行う**日本的なゲームを企画**することとし、**日本語のゲームも楽しめるボードゲームを2種類作成**
- マスキングテープを使った名札を作る「日本語バディ」と、最近大都市の観光名所を題材にした「神戸検定～最近大都バージョン～」を行うことを決定

<成果>
- 外国人住民は、高齢者や子供など様々な層の方がボードゲームを楽しんでもらうことができた
- 学生はイベントを企画し運営するなかで、様々な工夫をしることとなった。初めて接する方々へ対しての接客の難しさなど、学びも得ることができた

<シェアハウス設計チーム（2年生12名）>

<概要>
- 事業計画（5月時点）では、イベントの内容となる空間の設計の意見・要望の検討等を学生が行う予定であったが、諸所の理由で実施とならず、そのため、外国人向けのシェアハウスの設計・提案を通して地域課題への取組の意識の醸成に繋げることとした
- R6.10月から、実際の空き家を外国人のシェアハウスとリノベーションする提案の検討を開始した
- 検討に際しては、**それまでに行ったボードゲーム**の調査の経験を活かし、**既存事例を参考にし、既存事例を参考にする中で、住民との交流を想定する中間案**を考えた

<成果>
- 模型やプレゼンテーションボードを展示し、外国人住民や地域の方々より、**提案内容のための様々な意見を得ることができた**

12月

R6.12.20 シェアハウス設計 最終発表

- これまでのイベント実績の成果や、地域協議や外国人住民の意見を踏まえて、ハード面とソフト面の両面から提案を作りあげた
- 役員会、外国人住民の方々、大分県、豊後大野市役所、国際交流協会の皆様に参加いただき、**活発な意見交換を行う**ことができた

A案（2年生10名）▶

B案（2年生10名）▶

■学生による課題解決行動・地域への成果

学生による課題解決行動と地域への成果は以下の3点である

1. **外国人住民の居住支援の提案**：外国人居住者の住居の現状やインタビュー調査を通して、居住実態・課題を把握することができた。特に、大学生ならではの視点が入ることで、実施者の目線からの、課題だけではない多面的な提案を実現した。また、イベントの実施やシェアハウス設計の過程を通して、インタビュー調査だけではわからない、住居等の暮らしに関する幅広い見地から意見をフィードバックとして得ることができた
2. **交流イベントや居住環境改善に向けたアイデアの提案**：外国人居住者や地域住民と交流しながら、学生自身で考えたイベントの企画や、空き家再活用方法の提案を行うことができた。いずれのアイデアも今後さらに議論・発展する可能性があり、地域にとって有益なアイデアを提案することができたと考えられる
3. **多様なステークホルダーとの関係形成**：調査や提案を考える過程において、外国人住民に加え、地域の関係団体様や、外国人住民を雇用する企業など、様々なステークホルダーと連携することができた。特に、イベントの企画や、当日の準備・運営を通して、大学生が「外国人住民との共生」に向けて取り組む、良い機会と結果に繋がることができた。このような関係性の構築は、今後地域における地域社会実現に向けた重要な基礎を成すものであると考えられる

事業の様子や動画もページ上部のQRコードからご覧になれます

梨の葉を利用したお茶の製造

別府大学（食物栄養科学部　発酵食品学科）

課題

【地域が抱える課題】

由布市庄内町は大分県有数の梨の産地である。課題として、生産者の高齢化が進むことによる生産農家の減少、シーズンオフの売上減少、摘果果実の廃棄、剪定した枝葉の処理などが挙げられる。

目的

シーズンオフの売上減少、剪定した枝葉の処理の2つの課題に着目し、梨の葉を原料としたお茶の製造を目的とした。

期待される効果

不要となっている葉を原料としてお茶の製造を行うことで、梨の新規な有効利用とシーズンオフにも販売可能な商品が期待できる。また機能性成分について分析することで商品の付加価値を高め、ブランド化を促進する。また、商品創発をすることで、地域の農産物に関する学生の関心が高まることも期待できる。

事業内容

＜対象者との交流＞

由布市由布町の梨農家への学生によるヒアリングを実施した。葉の収穫時期、収穫方法などを中心に、梨栽培における現状・課題についてお話いただいた。

【ヒアリング結果】

・葉の収穫時期は、主に12月～2月ごろに行われる。また5月に摘葉作業を行った際にも、多く葉が落ちて枝などがあるため収穫を行う。

・葉の処分方法は、そのまま放置です、焼却することが多い。

・収穫時の葉の状態については、①病害虫外の虫の中でも白斑の葉が激しいこと ②年によって収穫時の葉の量が違うこと ③病害虫外の虫の種類を分析に委ねる場合は小スケールでまあまあでもよく大スケール（1ヘクタール）量が必要になりコストもかかること、などが難しい。

・梨のシーズンオフの時にPRができない。

＜梨の葉茶の製造＞

【製造工程】　使用した梨の葉の品種：幸水、豊水、新高

試作1

①それぞれの葉を1枚ずつ焼き

②天日干しで2日置いて乾燥

③手揉み

④手揉み

※作成したお茶はジップロックに入れ、室温で保存した。

試作2

①それぞれの葉を1枚ずつ焼き

②手揉み

③手揉み

④手揉み（蒸し器で5分）

※梨農園による乾燥（80℃1日）

【完成した製品】

完成したお茶は、保存中に蒸成した。葉が等に微生物等のはたらきによりお茶が発酵したと考えられる。酸素を失活させるため、乾燥（試作1）、蒸し器（試作2）を実施した。結果は、

試作1と試作2の結果から、梨の葉は手揉みでまずおお茶にする。すなわち緑茶を作成するのは難しいと判明した。そこで、日本茶ではなく、紅茶、またはハーブティーとして開発することとした。

梨の葉茶は試作1の製造工程で製造。

＜機能性試験結果＞

【抗酸化活性】

抗酸化活性が認められたが、緑茶よりは低かった。

【血圧上昇抑制効果】アンジオテンシン変換酵素（ACE）阻害活性

アンジオテンシン変換酵素（ACE）は血圧上昇に関与する酵素である。この酵素の阻害活性が高いほど、血圧上昇抑制効果が期待される。

緑茶と同時期（最水70℃）またはやや低いが効果が認められた。

【タンニン量】

全ての品種で70℃より90℃で抽出した方がタンニン量が多かった。

また、緑茶よりも梨の葉茶の方がタンニン量が少なかったので、梨の葉茶の方が渋味が少なく感じられると予想された。

＜活動体制＞

＜味覚調査装置による味の数値化と人による官能試験＞

お茶を入れる温度によっても渋味や苦味が異なる。お茶の温度は淹い方が渋味や苦味成分の抽出が多くなるため、70℃および90℃で入れたお茶の味を比較することとした。

【味覚調査装置による味の数値化】

苦味の違いによる味の違い

苦味が強く渋味雑味（苦味）と渋味（苦味）、苦味雑味（苦味）、苦味（後味）が強い。特に渋味雑味（苦味）は他の梨の葉茶より2～2倍強い。

抽出温度の違い

・最水は90℃で抽出すると渋味雑味が強くなるが、苦味にはあまりと差がなかった。

・最水は90℃では、苦味雑味と苦味が減少し、旨味も減少した。

・梨農は90℃で抽出すると他の梨より旨味が強くしたが、70℃抽出最水より梨と同程度であった。

➡ 梨農70℃抽出最水は他の梨茶よりも渋味、苦味が少なく、旨味もさっぱりとした旨味がある。飲みやすいお茶である、と考えられる。

・最水90℃抽出最水は他の梨茶と同様に苦味が強くなって、味雑味の強い、最水90℃抽出梨茶は苦味雑味が強いため他の梨茶より苦く感じると考えられる。

【人による官能試験】

パネラー10人に対して、試飲したのち、アンケートを取った。5段階（1点で「まずい」点で）で評価した。好き（総合評価）が最も高かったのは、梨農90℃抽出茶であった。香りの強さや渋味、味の濃さ、後味のよさが好まれたと考えられる。梨農70℃は、すっきりしているという評価は最も高く、その他の味覚調査の結果と一致した。

まとめ

梨の葉茶は、飲用として適していた。問題とお茶の製造では、梨農90℃が、香りの強さや渋味、味の濃さ、後味のよさで好まれた。また、抗酸化活性と血圧上昇抑制効果を示した。

緑茶よりは少ないがタンニン量もあることから機能性表示食品としての可能性がある。完成した梨の葉茶は、教職者に協力して試飲していただく予定である。

梨の葉茶の味

中津市本耶馬渓地域の放置果樹に係る課題解決に向けた体験型サービスの開発

指導教員：大分県立芸術文化短期大学　国際総合学科　等任講師　秋葉　厚志
協　　力：中津市役所　本耶馬渓支所　地域振興課

地域課題

本事業で扱った地域課題は、**中津市本耶馬渓地域における「放置果樹」の収穫・管理を行う担い手の確保**となる。

高齢化が進行した結果、日本の各地で果樹等の管理に手が行き届かなくなり、収穫時期を過ぎても果実が放置される「放置果樹」の問題が生じている。そのため、当課題に着目した取り組みは、他の地域にとっても示唆に富む結果を得られるものと見利される。

【背景1】中津市本耶馬渓地域における高齢化と人口減少

【背景2】果樹を管理する人材の不足

【背景3】果樹の放置に伴う害虫などのリスクの高まり

【地域課題】放置果樹の収穫・管理を行う担い手の確保

事業目的

本事業では、**「放置果樹」の収穫・管理を担う「交流人口」の増加を図るため、「放置果樹」を活用した体験型サービスを開発することを目的**とした。観光客等の「交流人口」の増加を図し、「放置果樹」の管理などを中長期的に担う「関係人口」の創出を図ることも目的の一つとなる。現在、地域資源活動に対する就農者のニーズが高まっているため、地域資源型の体験型サービスに注目した。

【機会】
地域資源活動への
就農者ニーズの高まり

【地域の強み1】
体験型サービスに
活用できる
地域資源が豊富

【地域の強み2】
都市部から
アクセス
しやすい

事業内容

本事業では、**地域に貢献できる体験に対し興味・関心が高い参加者層を設定するとともに、放置果樹の果実収穫を軸にした体験型サービスを開発**した。サービスの内容は、①「放置果樹の果実（カボス）収穫体験」と②「薪で焼くピザ作り体験」とした。地域貢献に資する収穫体験だけではなく、果実を味わえる体験を提供した方がサービスの魅求力が高まり、「交流人口」増加につながると考えたため、このようなサービス構成とした。

活動内容としては、サービスの開発に向け、中津市や外部団体の協力を得つつ、現地にてレシピ開発やサービスの試行などを行った。また、一般の方向けにモニターツアーを開催し、サービスの事業性などを検証した。

なお、放置果樹の果実収穫体験を行う際には、果樹の管理ができなくなった農家の方との交流の機会を設けるなど、地域に貢献していることが実感できるようにサービスを設計した。

【活動の流れ】

サービス開発に関する知識等の調査／中津市本耶馬渓地域の視察学習

体験型サービスの企画案作成

第1回フィールドワーク（現地調査）／サービスの改善

第2回フィールドワーク（現地調査）／サービスの改善

モニターツアー開催

地域への成果

モニタツアー参加者へのアンケート結果を踏まえると、**地域貢献型の体験型サービスは地域の担い手確保に一定の効果がある**と考えられる。

また、サービスの企画から提供まで学生が一貫して体験できる機会は少なく、この点からも活動の意義は大きい。

【アンケート結果①】
モニターツアーの満足度*

「企　画」：100%
「価　格」：89%
「接　客」：89%
「雰囲気」：100%

＊「とても満足」または「満足」と回答した割合

＋

【アンケート結果②】
定期的な農業体験に対する参加意向

「意向あり＊」：78%

＊定期的な農業体験に参加してみたいと「とても思う」または「思う」と回答した割合

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

オリーブ栽培農家の6次産業化をめざして
～オリーブ不良果実を利用した商品の開発～

別府溝部学園短期大学／食物栄養学科　教授　牧　昌生

講師の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

本耶馬渓の観光推進事業（温泉・観光・食）
道の駅「耶馬トピア」周辺の観光化の可能性と集客力アップを探るフィールドワーク支援事業

別府溝部学園短期大学／食物栄養学科　特任准教授　安達　美和子

おおいた地域連携プラットホーム　令和6年度フィールドワーク支援事業

中津市本耶馬渓「道の駅耶馬トピア」周辺観光化の可能性と集客力アップを探る

「道の駅耶馬トピア」周辺の観光の魅力探し ⇔ 現地調査フィールドワーク

学生×本耶馬渓支所との意見交換及び提案

特産品の「そば」を使った商品開発

そば粉を使った（仮）そばんこスパイス考案
農協がこぼれ落ちるそば粉をそば粉に変えて試作→そばの風味がない→そば粉をスパイスに変換→スパイスの香りとの比率を見つけるために、何度も試作→完成

そば粉を使った（仮）小鹿田焼ちゃ（だんご）考案
そば粉を使っただんごの試作→時間の経過とともに固くなる→配合→配分の変化
豆腐の成分→味と食感に不満→そばの風味がない→そばの実を使って
味噌のトッピング→完成

イベント「地域の宝さがし教室」実施

実施日：2024年　10月14日・15日
場　所：1日目本耶馬渓小中大田舎の学校（耶馬渓小学校）30名参加
2日目小倉南区本耶馬渓の学校　62名参加
地域のカルテ（資源調査）アウトドア活動
若者の減少での地域資源の磨き上げと持続的な保に関する次世代へつながる取組みを実施

2日目
・そば粉を使った商品の試食
・大学生と中学1年生の交流
・地域の方々との「地域課題に向けて私ができること、したいこと」をテーマに
意見交換・交流会

情報発信の方法　インスタグラム活動

若い世代の情報収集のツールとして99%と多く使われるため、インスタグラムの活動を実施

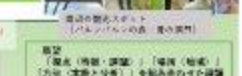
観光の拠点となる道の駅耶馬トピア
魅力のキーワード「対と様のコントラスト」

アンケート調査と分析

現状的な数値による状態の位が必要

質問	数値					合計
学校・こちらに来たことはありますか？	アクセス	観光	体験	その他		34
	14	20	0	0		
どちらでこの場所をあなたは知りましたか。	ホームページ	SNS	ウワサ	その他		40
	0	0	19	21		
学校・観光地を知ってもらえたか。	知っている	知っている	ハハ	その他		44
	34	10	0	0		
観光・イベントの参加は何回参加したことがあるか。	20以上	10回	3回以	1～0回		46
	23	21	2	2		

大きな公園、自然を感じられる「耶馬トピアパーク」のイメージを持ち、パンフレット作成



現状
「観光（特徴・課題）」、「場所（地域）」「方法（実施と分析）」を組み合わせた課題解決の可能性を重視しながら地域の実態を知るためのフィールドワークを実施したことで様々な発見があったと考える。この取組みが一過性のものではなく、企業側の活動によって更に貢献できると考える。

事業の様子や報告はページ上部のQRコードからご覧になれます

被災地域住民の防災やコミュニティに対する意識の変化と健康状態の調査

大分大学医学部看護学科 基盤看護学講座 健康科学領域　加藤 哲也
大分大学医学部看護学科4年（学生CERD）　藤井 蓮

地域が抱える課題・事業目的と背景

令和4年由布岳16号
大分県由布市湯布院町清平地区
（大分大学CERDの資料より引用）

・大分県由布市湯布院町清平は、日本各地の中山間地域の現状と同様に、少子高齢化や人口の急減により、人口減少が進んでいる。2020年7月の豪雨で45の住民が命を落とし、その後も2022年の台風で山村で作業していた作業員2名が亡くなり、2023年の台風に伴う集中豪雨では地震りなどの災害が立て続けに発生している。大分大学 医学・看護学デザイン教育研究センター（CERD）は、被災した地域の防災や避難行動の実態を調査し、避難所生活における健康管理の課題なども明らかにしている。

・本事業に参加している看護学科4年の藤井蓮は、大分大学CERDの学生組織の中心として活動しており、事例の被災地が抱える課題をしっかりと認識し、災害後の健康支援活動や防災・減災の啓発活動といったボランティア活動を続けている。2024年4月に「被災地域住民の防災やコミュニティに対する意識の変化と健康状態との関係」をテーマにしたいと申し出を受けた。

・そこで今回、清平地区住民を対象として、心身の健康状態や防災、コミュニティに対する意識との関係を調査し、平時における地域保健活動ならびに発災時の被災地や避難民への支援の一助になることを願い、調査することにした。

事業実施経過及び実施内容

説明への同意文書の説明　　説明へのアンケートの説明

・調査にあたっては、事前に由布市湯布院町役場と清平地区の自治会長の許可を得て、調査目的の内容、および地区住民の事業説明会を行う日程などを記載したチラシを作成し、説明会で清平地区住民に説明した上で実施した。さらに2024年6月17日の防災学習会でも調査の説明を行った。

・実施の調査は、2024年7月10日、11日、8月3日、5日、8日の合計5日間に説明会開催し、調査協力を得られた住民様すべてに対して、アンケート調査の趣旨と聞き取りによる記録を中心に実施した。ご高齢の方も多いことから、調査協力者の負担を軽減するため、自由記載の質問は聞き取りとした。

・内容は属性（1設問）、身体の健康状態（10設問）、こころの健康状態（4設問）、被災経験と防災意識（9設問）、地域のコミュニティに対する意識（6設問）を問う、合計30設問（自由記載含む）である。調査者は64名で、清平地区住民の27.9%であった。

学生による課題解決行動と地域への成果

・データを解析する段階で、清平地区は停今、新しい自然災害を受けているが、人口減少に歯止めがかかっていることが明確にされた。清平地区では、災害が発生したあとも人口減少が加速しなかったのは何故なのか？ということを念頭においてデータを解析した。

・学生は調査結果をまとめて、「被災後も人口減少が加速しなかった地域の要因とコミュニティレジリエンスに関する検討」というテーマで学術調査を実施し、2024年10月19日に発表を口頭発表した。その内容は参加した学生の感想からも高く評価されていた。

・さらに、調査で得られた結果を提案資料にまとめ、2024年12月24日に清平地区の自治会長ならびに防災会の役員を訪問し説明をフィードバックした。また12月16日には、由布市湯布院町役場職員を訪問し、ここではスライドを用いて説明資料を作成した。

・なお学生は、2024年10月26日に清平で開催された「青のとし事業」に参加、参加した清平地区にも協力し、体験と温かい交流を深いました。

令和6年度「地域研究」発表会
2024年10月19日

説明へのアンケートの説明の様子

解析結果の概要、ならびに、その結果に基づいた『清平地区の防災・減災に関してきつの提言』

『清平地区の住民は、被災が起こることに対しての危機意識が地域への愛着は、他地域より高かった。2019年以降も豊富な被災を経験し、現在でも心身の健康には負担を強いているが、被災経験はそれを乗り越えようとしたルフケアに繋がっている。教育的な災害の発生に続けたあとでも人口減少が加速しなかったことの要因は、地域への愛着なのかもしれない。愛着の強さは、活発な情報的な交流や協力関係、さらに地域活動への積極的参加などと密接な相関関係を認めた。被災経験がある者は、被災後から現在までの体験は豊富していると、地域への愛着は、有意や有性。被災経験の有無と強化して、被災後から現在までの地域の変化と有意な差の相関関係を示した。この結果は、地域への愛着が強まれば被災による負の経験を強化していると解釈できる。一方で、防災意識が高くても、防災行動の実践に結びたあとでもあった。防災行動の指針となるハザードマップの活用を高める具体的な提案が必要と考えられた』

1．災害を忘れない防組みの発信
「今後も水害や土砂災害は発生するかもしれないので気をつけよう」

2．防災ハザードマップの活用の徹底
『清平地区全110世帯の自宅周辺や避難経路のマップの作成と配布』

3．地域への愛着を活かした防災・減災活動の活性
「地域住民の声を実践に繋ぐことから始めよう」

謝辞
調査協力していただいた清平地区住民の皆様、区長様、調査実施にご尽力いただいた由布市湯布院町役場保健師の伊藤美穂、大分大学CERDの橋詰裕人先生、福田国代先生、またアンケート調査に協力していただいた大分大学医学部看護学科4年生、学生CERDの皆様、関係各位に感謝を申し上げます。

湯治ぐらし×家庭科：ゆたかな衣食住を通じたwell-being向上プロジェクト

大分大学／教育学部　准教授　川田　栄穂子

おおいた地域連携プラットフォーム 令和6年度 フィールドワーク支援事業

湯治ぐらし×家庭科（大分大学教育学部）

ゆたかな衣食住を通じたWell-being 向上プロジェクト

教職教員：大分大学教育学部　川田栄穂子・都甲由紀子

■活動する地域とその課題

別府市（鉄輪地区・小倉地区等）：別府市鉄輪地区は、別府八湯の一つとして鎌倉時代より湯治地として栄え、豊富な温泉に恵まれている。地区内には多くの共同浴場や旅館、貸間旅館、商店等が存在し、昔からの湯治場的雰囲気が人口減少が進んでおり、コミュニティが観光地としての魅力を高めている。

一方で、過疎では高齢化や人口減少が進んでおり、より若い世代の移住や定住、関係人口の増加が求められている。また、空き家や空き店舗、廃業がおちらず増加する傾向などがあり、それらの活用や再生・継承が課題になっている。

■連携企業：湯治ぐらし株式会社

別府市鉄輪地区などで、湯治を暮らしに取り入れるプロジェクト型シェアハウスを3軒運営している。代表取締役の首野静氏が、別府市への移住を機会に、空き家を由りてリフォームし、女子専用のシェアハウス「湯治ぐらし1」を2020年にオープンしたことがはじまりである。

既在同社では、主にシェアハウスの居住者を対象として、食生活改善のための「みんなの炊事場」、心身の健康状態の診断やカウンセリングを行う「みんなの保健室」、地域交流の場の提供などのプログラムを実施している。

より若い世代の地域への移住や地域参加、湯治文化の浸透を促す同社の取り組みは、シェアハウスの居住者のみならず、地域全体のwell-being（身体的・精神的・社会的な健康）の向上に寄与している。

出典：湯治ぐらし株式会社作成資料より

■プロジェクトの目的

湯治ぐらし株式会社では、これまで主にシェアハウスの居住者向けに提供してきたプログラムを、地域の人びとや、リーグーションを目的とする源泉型旅行客に対象を広げ、さらに地域の活性化に貢献するプログラムの改善や開発を検討している。

そこで、より良い衣食住の生活を追求する「家庭科」を専門とする大学教員と、家庭科を履修する大学生がワークショップ（以下、WS）に参加し、湯治ぐらしのスタッフやシェアハウスの居住者、地域の関係者と交流し、ともに体験・実践することで、湯治ぐらしでWell-being を高めるプログラムの改善・開発に協力し、その魅力発信の一助となることを目的とする。

■湯治ぐらしのゆたかな衣食住とWell-being

Well-being とは：身体的、精神的、社会・経済的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来における持続的な幸福を含む概念。

この事業において、湯治ぐらしに暮らし、ゆたかな衣食住を追求する「家庭科」の視点から、個人や地域のWell-being 向上に寄与する体験・実践プログラムを検討する。

■ゆたかな衣食住を通じたWell-beingの向上

■事業実施経過及び実施内容

2024年9月～11月に、オンラインによる打合わせを実施し、湯治ぐらしの衣食住で高まるWell-being向上効果の把握や意見交換、WSの企画を検討をした。また12月に、WS会場となる「七日一巡り」を視察し、講師にお招きする桑城あゆみ氏（からだこころ健幸協会）と行橋管京氏（温泉保研究所）を加えた研究会を開催した。これらの内容は、大分大学教育学部の家庭科専門科目の授業等において、学生と情報を共有し、フィールドワーク（WS）に向けた準備を行った。

2025年1月11日に、湯治施設「七日一巡り」で、以下4つのWSを開催した。大分大学教育学部の教員・学生、湯治ぐらしのスタッフ・居住者の学生（立命館アジア太平洋大学）、講師など14名が参加した。

❶住生活&家族・家庭生活ワークショップ

❷食生活ワークショップ

❸衣生活ワークショップ

❹総合ワークショップ

■課題解決行動と地域への成果、今後の課題

大学生が衣食住に関わるプログラムを体験・実践し、それらの改善・新規開発に協力することで、より若い世代が抱える Well-being の課題改善につながり、若い世代でも取り組みやすい共存への発展につながったと考える。総合WSでは、若い世代が抱えやすいWell-being の課題をふまえて、湯治ぐらしの新しいプログラム（企画）案を検討したが、学生からは、居住者や源泉者のみならず、地域とのつながりを持ち、地域全体のWell-being を高める内容が要望された。

今後は、より学生の主体性や地域・社会への魅力発信を意識する活動へと発展させていきたい。

事業実施：大分大学教育学部（家庭科）　連携企業：湯治ぐらし株式会社

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

ノルディック・ウォークを用いた健康寿命延伸と地域の担い手づくり事業

大分大学経済学部　三好　裕之

福祉健康科学部４年　河田　恵　川元　冴夏　釘宮　弥来　荒本　珠来　佐藤　春陽　和田　真歩

事業目的

1.介護予防：基礎的データの収集.
2.高齢者の運動習慣の啓発を行う.
3.住民自らがノルディック・ウォーク技法などを実施する機運作り.

体力測定会

ノルディック・ウォーク教室

地域住民のコメント

1.歩くスピードが速くなった.
2.手摂をして歩けなったが，ノルディック・ウォークを行うようになって歩けるようになった.
3.背筋が伸びたように感じる.

学生のコメント

1.ノルディック・ウォークを通して健康意識を高め，人と人をつなぐ実践が理解できた.
2.地域の資源文化に触れる機会となった.

大分県内（別府市）災害時における外国人対応について、避難および避難所に関する必要な英語の聞き取り、防災マップ作り（避難用語・避難所に使用できる使い方の検証）

大分大学／経済学部　講師　朝美　瑞子

大分県での災害時における外国人対応のための防災アプリの開発

避難用語・避難所に使用できる
アプリ開発及び使い方の検証

概要

事業背景・目的

多くの外国人観光客を受け入れている日本において災害時には多言語対応の強みを発揮してきている。しかし、多忙多くの外国人が災害時には語彙に乏しいため、避難所までの移動や情報に戸惑うように思いてしまのかわからない、大分県においても同様な問題が起こることを想定し、**誰もが安全な避難方法や多言語で提示したい。**

事業内容

事業の方向性（災害時のために）

言語を問わず、国籍問わずを問わず、別府市を中心とする大分県全域に滞在する外国人の防災意識の向上をするとともに、**災害時の避難路・避難所への道順や情報を提供する。**さらに避難所などでの必要な情報へのアクセスの容易さを目指す。

ターゲット層

別府市を中心とした大分県の在住人およびインバウンドを含む**外国人**

取組んだ内容

学生は本格的からアプリ開発に挑戦し、その開発に当たっては、地域企業の支援を受けた。私たちは、災害の発生を学び大分県には様々な災害があることを学んだ。さらに外国人観光客は多、実際に日本で災害が起こった際に、何に困っているのかなどの調査を行った。その結果、災害の大きさによる色分けが有効であったり、多言語対応やピクトグラムを使用することの大切さを学んだ。
このような教学習から、観光を概要し、別府市を含む大分県への災害に対するより良い街づくりを目指した。**状況別やは国外地から番号避難所の表示、多言語対応のチャット機能の動作を確認**した。文化の特徴である場所をキャラクターに投影する工夫も行い、メチャットには**国籍を超えがちな避難所生活でも話し合いの一助になるような工夫を加えた。**開発に苦労があったが、専門家の助言を得ながら進め、今後さらなる検証が求められる。

心を休まるAIチャット

地域への成果・効果

別府市はまくの外国人観光客を受け入れており、同時に多くの外国人学生や定住者も抱えている。旅行者を含めて世界に対して**防災時の取り組みに関してより一層の発展と避難路への提案、また防災意識の向上が期待できる。**さらに今後別府市がより安全に観光客を誘致することにも寄与できると考えている。地域への貢献の試験期間までは期待のところ実施できていない。市内の限られた場所での活用のみの試験となっているが、今後実地レベルでのテスト運用を望むべく、改善を求めたい。

アプリ内容

サイトのメニュー（各語でクリックすると詳しい内容がわかる）

各くの避難所までの道案内と、地図の詳しい説明

今後の展望

今回のアプリ実用を通じて、災害時に必要なコンテンツや情報、サービスについて多くの知見を得ることができた。アプリ、サイトの運用においてもまだまだ改良を重ねられる部分は多いと思われる。別府市の継続的サポート面も含めた、今後の実証検証などの検証を通じて利用度がある程度のコンテンツを絞り出せるよう、さらに活動を続けていきたい。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

大学生認知症サポーターによる共生社会実現プロジェクト

大分大学／医学部　教授　三重野　英子

大学生認知症サポーターによる共生社会実現プロジェクト

大分大学医学部看護学科

学生：[illegible]
教員：三重野英子 ほか

【地域課題】認知症や認知症の人に関する知識を正しく理解する必要があるが、無関心や誤った理解、偏見がある。

【目的】
1. 学生が、認知症の人に対する理解を深め、学生の視点から、共生社会の実現における地域課題をとらえる。
2. 当事者、家族が、学生との共同活動を通じて、共生社会の実現に向けた希望や役割を見出す。
3. 地域の人々が、認知症や認知症の人に関心を寄せる。

	活動	協力・連携
A	認知症サポーター養成講座	出布市地域包括支援センター（認知症地域支援推進員等）
B	ソフトボール交流戦	なでしこガーデンデイサービス
C	街頭活動	認知症の人と家族の会　大分県支部
D	オレンジハート事業	出布市地域包括支援センター

＜ A　認知症サポーター養成講座 ＞

学生全員、認知症サポーター（認知症についてよい知識と理解をもち、地域で認知症の人や家族にできる範囲手助けする人）になる

認知症地域支援推進員等による講義・寸劇を通して、認知症の人を理解する機会やかかわり方を学ぶ。

《学生の気づき》
- 授業で学習していたが、認知症の人とのかかわり方について新たな発見があった。
- できなくなったことではなく、できることに目を向けることが重要と気づいた。
- かかわり方の違いで多くの認知症の方が幸せに生活できると感じた。

＜ B　若年性認知症の人とのソフトボール交流戦 ＞

なでしこヤングイヤーズ（若年性認知症の人）　VS　ゆさまナースエンゼルス（学生・教員等）

若年性認知症の人が活用利用するデイサービスのチームと学生・教員チームの真剣勝負

《学生の気づき》
- 認知症になっても下を向かず前を向いて生きている。
- 知るだけでなく、一緒に活動することが大切。
- 「その人が楽しいことや持っている力を発揮すること」、「仲間と楽しむこと」が重要。
- 皆で楽しむ場があることで、認知症があっても、そこで暮らし続けることができる地域になる。

＜ C　アルツハイマーデー街頭活動 ＞

9月のアルツハイマー月間にあわせ、大分市、由布市、佐伯市での啓発活動に参加

「認知症の人と家族の会」の方々と一緒に街頭に立ち、行きかう人にリーフレットを配布

《学生の気づき》
「私の祖母も認知症だから」とリーフレットを快く受け取ってくださる方がいる一方で、「大丈夫です」と受け取ってもらえないことも多かった。人々の価値や情況、受け取る人の側に地域差がある。
認知症と認知症の人について、もっと地域の人々に知ってもらいたい、関心をもってもらいたい。

＜ D　オレンジハート事業への参画 ＞

認知症になっても安心して暮らすためにの「今、わたしにできること」―由布市民の声を集める

オレンジハート事業は、認知症啓発を目的に、毎年、出布市地域包括支援センターが、事業所で回答票形式実施、テーマについて、考えたことをハートの付箋紙に書く。この回答の「声」は、出布市の認知症施策に活用される。

市民の声，228個を整理・分析し、結果をポスターとしてまとめる

《学生の気づき》
- 認知症のご本人の「今のままで幸せです」等の声から、これまでと変わらない暮らしが続くことが願いだと気づいた。
- 一つひとつを読みながら、書いた人の情景や言葉に込められた思いを感じた。

【大学生認知症サポーターの活動の成果】

◆学生の視点からとらえた地域課題
「認知症の人と一緒に活動する場や機会をつくる」
- 認知症の人と一緒に活動することで、「支援される人」というイメージが一掃され、自分の認知症観が変わる。
- 共生社会の実現に向けて、一人一人が輝ける場を当事者とともにつくることが重要である。

◆認知症の人にとって、個性を輝かせる楽しい時間、ユーモアで学生の関係を深める等、本長者の役割を発揮した時間になった。

◆家族にとって、学生の気づきや学びが活動の継続しになった。

◆地域の人々には、認知症啓発に携わる学生の姿をみることで、「認知症の理解は全ての世代にとっての課題」というメッセージが伝わるのではないか。

別府明礬地区にて生産される「湯の花」の地球化学的現地調査

大分大学／理工学部　教授　江藤　眞由美

おおいた地域連携プラットフォーム 令和６年度 フィールドワーク支援事業

別府明礬地区にて生産される「湯の花」の地球化学的現地調査

大分大学理工学部共創理工学科応用化学コース　学部4年生：3名
大分大学理工学部理工学科　生命・物質化学プログラム　講師　江藤　眞由美

活動背景

別府の明礬温泉地区で江戸時代より行われている「湯の花」製造は、国の重要伝統的民俗文化財に指定されている。江戸時代から変わらぬ製法で「湯の花」が生産され、この主成分は硫酸アルミニウム系鉱物や硫酸鉄等である。古くから行われている「湯の花」の生産であるが、原料の結晶や近年の気候変動等の影響を受け、生産量の変化や原料の安定的な確保等の課題を抱えている。「湯の花」を生産する小屋内部の環境は小屋毎や季節毎に微妙に変化し、その事が「湯の花」の成長速度や生産量等に影響を与えていると推定される。

そこで本活動では、湯の花小屋を所有されているみょうばん湯の里社にご協力をいただき、小屋内部の化学的調査の許可を得て、小屋内部の温度、湯泉等の条件や使用する粘土の性状変化を定期的に調査、湯の花小屋内部の環境と生産される「湯の花」の生産量や組成との因果関係を探ることとした。

活動概要

活動人数
学部生 3名
教員 1名
外部講師: 1名

活動期間
2024年5月～2025年1月

活動場所
別府市明礬温泉
株式会社みょうばん湯の里社所有の湯の花小屋

課題解決に向けた調査内容

1	生産された湯の花の定期的な分析
2	小屋内部の温度測定
3	小屋内外のガス分析
4	気象データ-発生産量の関係性(今後)

*屋内環境に快適ではない状況の生産者様の協力、深く感謝申し上げます。

① 湯の花の定期的な分析

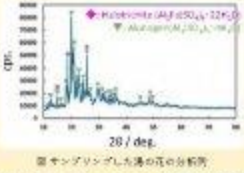


図 サンプリングした湯の花の分析例
Halotrichite, Aluniogenite といった硫酸塩鉱物が主

② 小屋内部の温度測定

	場所① / ℃	場所② / ℃
表層付近	51.0	44.0
深さ10 cm	68.0	64.0
深さ20 cm	94.0	94.0

表層温度が40～51 ℃付近が湯の花生産条件?

小屋の表層から30 cm程度で熱に温度は100 ℃近く

③ 小屋内外のガス分析結果

温泉噴気ガスの採取口に、耐熱チューブを入れて、ガス成分を採取、その後、検知管で硫化水素、酸素、二酸化炭素濃度成分などを分析

複数箇所の噴気ガス採取口で測定をした結果、地点毎のガス濃度に分布があることが確認されたが、水蒸気量が多く、正確さにかける測定であった。現在、ガスの採取方法等を見直し、今後より良いデータを採取できるよう、改良を進めている。

今後は、参加学生を増やし、硫酸鉱物の解析を進めること、湯の花生産の最適条件を探っていきたい

参加学生へのアンケート結果(抜粋)

今回参加した学生からは、「硫酸鉱物ある様々な湯の花を知ることができた」等、計画内容満足が多く寄せられた。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

おおいた地域連携プラットフォーム　課題型地域活動事業

地域活性化に向けたオープンデータを活用する「まちあるきアプリ」の作成

木原塗介、久保田明輝、篠田航、鈴木雄太、寺岡晋伸、河野優樹、林修多、保江悠聖、安藤心青、西川純夫
（大分大学 理工学部 共創理工学科 知能情報システムコース）
協力：大分市役所大南支所地域おこし協力隊、Code for Oita

背景・課題

- オープンデータを有効活用した地域の活性化への取り組みがなされている
- 情報の公開は進められているが、それらを活用したICTによる地域の活性化についてはあまり事例が多くない

プロジェクトの目的

地域の特性を活かしつつ，散策する楽しさを提供できる「街歩きアプリ」を開発する
新たな視点で地域の魅力を引き出すことができるアプリを目指す

実施内容

マッピングパーティ

- 誰でも編集可能な地図のオープンデータであるOpen Street Map（https://openstreetmap.jp/）について，対象地域を歩きながら調査し，地図を充実させるイベント
- 戸次地区について散策し，各自が気になったところを地図に集約した

アイデアソン

マッピングパーティで集約された情報を活用に基づいて，地域が抱える問題点の抽出とその原因の検討，その問題の改善策に関して議論し，以下のような問題点が挙げられた

- 鉄道の＝製販売機や地元特有のカフェなどユニークなものがあった
- 神社や古い街並みとそれに関する施設は興味深い
- 別府では，人が集まっていろいろなことができそうであった
- 川沿いの堤防など景色の良いところも多くあった
- 本町では交通量が多かった，脇道に入ると歩きやすかった
- 街灯が少なく感じたので，夜の状況を調べる必要がある
- ベンチなどの休憩場所が少ない
- 歩行者用信号の切り替わりが早い

アプリの作成

- 「道ごとの情報を提示する」機能
- 調査者が実際に歩いた道に評価やコメントをつけてもらう仕組みを構築

まとめと今後の課題

- 地域の方と協議をしながら、地域特有の良さを知るとともに問題点を把握する良い機会だった
- 新たな視点を得ることができて，非常に有意義だった

文化財保存・継承と観光活用プロジェクト

～戦後80年に向けたピースツーリズム～

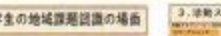
別府大学 国際経営学部国際経営学科　講師：小野雅史
学生：髙成恵介 江藤巳歩 木原萌子 赤塚和博 安東結衣 白田未来人 熊本竜弥 佐藤魁寿
中城健太 永見星凌 本多華人 本城あり々 森山怜実 湯浅 聡 宮川貴成
ウッダラー・チャラロチャニ チュータナー・ディウヤンジリ プラモディ・チャメンドゥ

1.事業目的と課題

平成31年4月に開催された「性証文化財保護法」に規定された文化財の保存・活用に関する総合的な法定計画である文化財保存活用地域計画により、香川県は現在の指定文化財だけはなく未指定文化財の調査など、幅広く文化財の継続的な保存と観光への活用が課題となっている。そのため、文化財の保存・活用に対する地域住民の関心や理解の促進、さらに地域のアイデンティティの再認識が期待されている。

文化庁が設定している「日本遺産」の要素を取り入れ、このプロジェクトを実施。「日本遺産」は、地域発信や人材育成・飲食・地域整備などの取り組みを、効果的に進め、点在する遺産を線としてとらえ、ストーリーとして「有形・無形」の文化財をパッケージ化し、活用と発信につなげる。恋愛のようなシリアル型は、自治体の枠を超えて地域（このプロジェクトでは大分県内）に点在している。特色ある文化財を、ストーリーという面でとらえることにより、地域の誇りやアイデンティティ形成につながる。

「日本遺産」のストーリーを法かたらえて、戦後80年を迎えるにあたり、太平洋戦争開戦から終戦および降伏文書調印に関して、大分県内の「モノ」や「コト」「ヒト」をやべに「点滅するストーリー」があると認識。それらに関わる「有形・無形、未指定」の文化財を観光資源として活かせるまちづくりを目的としている。



2.学生の地域課題提言の場面

4. フィールドワーク実施内容

まとめと今後の課題

◎【地域型】でまとめたものを、今後は大分県内全体のストーリーとしてとらえることにより、【シリアル】型の「ピースツーリズム」のストーリーとなる。
大分県において、太平洋戦争開戦から戦後の降伏文書調印に関して、「モノ」「ヒト」「コト」で後世に継承すべきストーリーであり、全国的にみても重要なピースツーリズムとなる。また、観光や学校教育としての活用に期待。

◎アプリ「SASSY」に折り機能は、入力することでモデルコースとして活用でき、施設ごとの紹介に加え、行程をマップにすることも可能。

◎「ピースツーリズム」に限定した観光資源を巡るだけではなく、飲食グルメスポットやカフェ、地域の方々との連携や協力により、文化財の保存・活用に対して、地域住民の関心や理解の促進、さらに地域住民のアイデンティティの再認識が必要。

事業の様子の動画をページ12掲載のQRコードからご覧になれます

地域文化財と大学博物館を活用した人材育成
－小学生を中心とした地域の歴史探訪と体験教室を通して－

別府大学文学部史学文化財学科3年　有馬悠樹　横坂愛

○本事業の課題・目的について

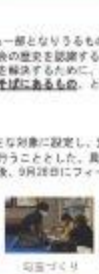
文化財は本来、地域の歴史を学び、自己を形成する一部となりうるものである。しかし現状、日常生活から乖離した特別なものという認識が強く、地域住民は地域社会の歴史を認識することのないまま、文化財を次世代へ継承するという意識が希薄となるのは必至である。この問題を解決するために、幼少期から文化財を身近に感じる機会を多くすることで、**文化財を日常生活の中で常に意識し、そばにあるもの**、という認識をもってもらうことを目的として活動を行う。

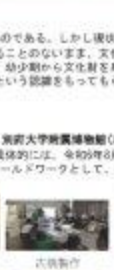
○課題解決方法

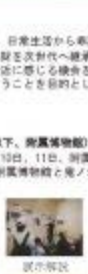
目的を達成する活動として、別府市内の小学生を主な対象に設定し、**別府大学附属博物館（以下、附属博物館）をコア**とした周辺の遺跡や文化財を活用したイベントを行うこととした。具体的には、令和6年8月10日、11日、附属博物館にて、勾玉づくりと古銭製作の体験活動を行った後、9月28日にフィールドワークとして、附属博物館と亀ノ甲屋古墳の見学及び学生による解説を行った。

①勾玉づくり
②古銭製作
} 附属博物館体験活動

③附属博物館周辺遺跡見学（フィールドワーク）
- 附属博物館特別展見学、解説
- 亀ノ甲屋古墳見学、解説


勾玉づくり


古銭製作


展示解説

展示質疑応答

パズル

ハンズオン

①勾玉づくり

紙やすりを用いて滑石を加工。学生が教えてあわり、楽しんでもらえた。当初、定員30人を想定していたが、19組40名もの方々が参加してくださった。

②古銭製作

低溫融金属を用いた鋳造により製作。流し込む作業が特に興味を惹いていた。

③附属博物館周辺遺跡見学（フィールドワーク）

特別展「装飾古墳の世界」見学解説
↓
ハンズオンやパズル、質問応答を通して交流
↓
実際に亀ノ甲屋古墳を見学解説

○参加者の感想

- 博物館を身近に感じることができた。
- 博物館に興味をもち、またこのようなイベントに参加したい。
- 別府市の古墳について初めて知った。

亀ノ甲屋古墳見学

亀ノ甲屋古墳　交流

想定よりも多くの方が参加し、学生と地域住民の活発な交流が行われた。博物館や文化財を初めて知った方や興味をもってくれた方の声が寄せられており、これからも、**博物館、文化財と触れ合える機会を提供し続けていきたいと考えている。**

○成果

当初想定していたよりも多くの地域住民の方が参加してくださり、イベントは大盛況に終わった。今回のイベントをきっかけに文化財、**博物館を身近なものに感じてもらうことができ、興味を持ってもらえた。**

また、学生側にとっても良い経験となり、学びを得られる貴重な機会となった。

亀ノ甲屋古墳　解説

特別展　ポスター

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

～がんサバイバーの"食べたい"を叶えるメニュー提案～
Cocoro Support Project

別府大学短期大学部／食物栄養科　福重 隆　茶野 春奈

がんサバイバーの"食べたい"たいを叶えるメニュー提案

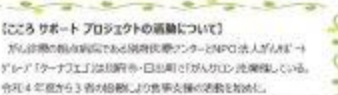
別府大学短期大学部食物栄養科

【地域が抱える課題と背景】

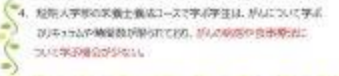
1. がんは県民総死亡原因の1位である。
2. 大分県のがん死亡率は全国平均を上回っており、県民の生命、健康レベルでがん対策は最重要課題である。
3. がんの進行段階中は栄養や食事管理が悪病「サバイバー」が事後、支援者の負担にもの生命の質に影響を及ぼす傾向がある。
4. 短期大学部の栄養士養成コースで学ぶ学生は、がんについて学ぶカリキュラムや時間数が限られており、がん病態や食事療法について学ぶ機会がない。

【こころ サポート プロジェクトの活動について】

がん診療の拠点病院である別府医療センターとNPO法人がんばっ！ケアー「ケーナフエ」は昨年・日出町さがんカフェ」を開催している。令和4年度から3者が協働しより食事支援の活動を始めた。



令和4～5年度　がんサロンでの活動



メニュー開発にあたって私たちが考えたガイドライン

令和6年度の活動　～その1～

令和6年度の活動　～その2～

【活動を通しての考察】

1. 病状が様々人の対象であり、食への思いを叶えることの難しさを実感した。
2. 栄養や食を専門とする者がカフェにへの参加には意義を感じた。再開した。
3. 今後も継続を含めて食事や栄養に関する学びを深めていきたい。

【食事療法研究会のメンバー】

亀川商店街再活性化計画策定事業（Ⅳ）

立命館アジア太平洋大学／サステイナビリティ観光学部　教授　須藤　慎徳

亀川商店街再活性化計画策定事業（Ⅳ）

立命館アジア太平洋大学サステイナビリティ観光学部　教授　須藤慎徳

6．背景

亀川商店街は別府市の中心部にある商店街で、JR亀川駅から徒歩5分に位置する商圏約9,000人の商店街である。近年は来街者も減少し、空き店舗の増加・治安悪化の深刻な課題が顕在化している。2013年にはその事業調査で見つけフィールド調査が開始したが、2020年に初期的に整ずれを実施して、約1年間の期間限定のカフェを開業したところ、近隣住民から高い評価を受け、その後NPO学生による「亀川のスーパーマーケット」の販売等の定期的に開催されるなど、商店街活性化のポテンシャルは十分にあることが確認できている。加えて、伝統の温泉地に直接し、イベント等による観光の発生等に留意し、すべての住民にとって空の入れ可能で持続的な取り組みを行なっていく必要がある。

1．本事業の目的

本事業は、これまでの別府授業での経験と学生たちによる亀川商店街での試験的なビジネス実地実践を踏まえ、亀川商店街の課題を特定し、商商店街の特性を活かしたビジネスによる商店街活性化方策を検討し、もって亀川商店街の活性化を図ることを目的とする。

2．実施内容

本事業は、秋セメスター開講科目「環境・開発　特殊講義/専門実習」として実施し、14回の授業のうち、8回は教室での講義（うち3回はゲストスピーカーによる講義）、2回は教室でのワークショップ、2回を現地フィールド調査、1回をパイロット事業実施、1回を公開発表会開催とした。

本事業は、①「知る」地域の歴史、②「学ぶ」基礎知識の修得、③「見る・聞く」現地フィールド調査、④「創る」事業形成、⑤「示す」公開成果発表、の5部で構成。

eスポーツを活用した「通いの場」の魅力向上事業

立命館アジア太平洋大学　サステイナビリティ観光学部　教授　メイルマノフ・セリック
立命館アジア太平洋大学　国際経営学部　教授　藤本武士

1，事業の背景

「通いの場」とは厚生労働省が推進する地域における交流の場で、大分県においても3,000箇所が所の「通いの場」が点在し、高齢者の憩いの場となっている。しかし、この「通いの場」においては、利用者の固定化や活動内容のマンネリ化など、ある一定の利用者に留まっているのが現状で、新たな利用者の促進においては、新メニュー開発など必要不可欠であり、更なる魅力ある「通いの場」づくりを目指し、高齢者の交流の機会の創出となることが必要である。そこで「eスポーツ」を提案し、実際に体験して頂き、今後の「通いの場」のメニューとして活用できるかを検証し、今後の「通いの場」の将来性も模索したい。

2，「eスポーツ」の体験会の実施

eスポーツとは、「エレクトロニックスポーツ（Electronic Sports）」の略で、ビデオゲームなどの対戦をスポーツ競技として扱えるものである。近年、eスポーツマーケットは急速に拡大し、2025年には日本国内のeスポーツファン数は1,000万人、市場規模は210億円を超える予測である（出典：日本eスポーツ連合）。また、19年の茨城国体では、競技種目(文化プログラム）にもなり、今後オリンピック、パラリンピックの種目も期待されています。

eスポーツは個人戦やチーム戦などゲームを通じて、共通の目的を持ちプレイ体験を共有することで、参加者間の交流や関係性が形成されやすい。また、比較的専門技術が必要なく、身体能力や認知機能、年齢の違いなどに関われずに参加することが可能であり、属性の異なる参加者の交流促進が期待される。したがって「通いの場」において、eスポーツを実施することにより、「通いの場」の利用者の範囲拡大や、高齢者と若年層、健常者と障がい者など属性の異なる利用者間の相互理解と交流促進を意図するものであり、ダイバーシティ、多文化共生の時代にマッチしたスポーツである。これに加え、ゲームを通じてデジタル機器の操作やリテラシーを向上させることで、デジタルディバイド解消の一助となることも期待。シニアにとっては、目から脳へ、そこから手足へ一連の動きは、プレイル予防にも繋がるとも考えられる。

3，実施スケジュール

大分県の「通いの場」にてeスポーツの体験会を実施し、参加者のアンケート等を実施し、交流促進策や課題点などを分析する。

4，実施検証

今回のイベント実施の前には、中津市会場と大分市会場で事前の練習会が複数回実施された。本番の大会に備えた練習時から、会場では随時アンケートをとり、体調や日頃の困りごとなどを聞きながら、eスポーツが何かの改善につながるのかを確認した。短期間での大きな改善の変化は見られないものの、継続したデータ収集の必要性は一定あるものと考える。来場者の楽しむ様子はどの会場も確認でき、想定以上に楽しかったとする感想は多かった。今回の実施内容は「通いの場」での取組みであったが、ウェルネス・ヘルスケアの多様な分野、あるいは違った場面・場所でも比較し、ケースを蓄積することが重要であると考える。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

No.23 小児慢性特定疾病児童等の成人移行支援

大分大学／医学部　助教　平野　直樹　　講師　後藤　亮輔

小児慢性特定疾病児童等の成人移行支援を推進するための調査

平野直樹[1]、後藤亮輔[1]、金崎理子[1]、江藤千晴[1]、井原健二[1]
大分大学医学部　1）小児科学講座、2）基礎看護学講座、3）実践看護学講座

背景：成人移行支援とは？

厚労省研究事業：成人移行支援コアガイド（2021）

- 小児医療の発展に伴い、小児期発症の疾患の死亡率は減少し、成人期に達するようになった。
- そのなかで、成人した患者が小児科に留まる事例も多く、生活習慣病など小児科では対応困難な問題がもし、成人移行支援の整備が求められている。
- 厚生労働省の事業で「成人移行支援コアガイド」が策定。16～26歳までに移行完了が目標。
- 厚生労働省が都道府県に対して移行期医療支援センターの設置を促すが9か所に留まる。
- 大分県では、移行期医療支援センターの設置はなく、移行支援の実態も不明である。

目的：大分県での成人移行支援の実態を調査

① 小児慢性特定疾病の症例調査

成人移行支援が必要とされる小児慢性特定疾病（小慢）に登録した症例の医療記録を用いた後方視的調査

対象）A病院の電子カルテ上に小児慢性特定疾病の登録があり、2024年3月31日時点で15歳～26歳の506症例
15歳0か月以遠までに小慢の登録が解除された126例と他101例を除外し、275症例を解析した
除外条件：小児科受診なし、解除理由のみ、患者死亡、登録確認不可、解除

結果）患者背景：男性 129名、66.2%、
解析時年齢 中央値 19歳11か月、移行完了者 177名、61.6%

② 質問紙調査

方法）大分県の小児医療機関に勤務する医療従事者を対象とした
質問紙調査項目：回答者の属性、成人期移行支援についての意見、成人移行支援の実施状況、その他。
成人移行支援の実施状況は、日本小児科学会の提言を元とした27項目について4段階尺度で質問した。

結果）回答者 102名/420配布、回収率 24.3%。回答者年代 30～50代 92.2%、職種 医師 38.2%、看護師 52.0%。

結論

- 慢性疾患を抱える小児患者への成人移行支援の整備が求められている。
- 大分県の成人移行支援の実態は不明であり、小慢患者の症例調査と小児医療機関への質問紙調査を行った。
- 小慢の症例調査では、成人移行支援には年齢や疾患群に応じた対応と移行期医療を支援する機能の整備が必要であることを示唆した。
- 質問紙調査では小児医療従事者が考える成人移行支援の課題として、患者・家族の事情、地域医療の充実、小児病院内の移行支援体制の整備、小児科対応患者数の増加、制度に関する課題が挙がった。

※　質問紙調査にご協力いただきました医療従事者の皆様に深礼申し上げます　※

講演の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

外国語対応ガイド等観光産業人材の養成

大分工業高等専門学校／一般科　准教授　Tomek Ziemba

外国語対応ガイド等観光産業人材

対象学生　：　大分工業高等専門学校　3年生　160名
指導教諭者　：　大分工業高等専門学校　一般主高准教授　Tomek Ziemba(トメック・ジェンバ)
　　地域共創テクノセンター
　　センター長／機械工学科教授　尾形　公一郎
　　コーディネーター／　浜野　清

1. 地域課題

①インバウンド等の増加に対応するための観光産業人材が不足している。
②インバウンド客のニーズが高い多言語ガイドの不足により、県内の魅力ある金銭、食、文化等の観光資源が少なく、未来の魅力発信にも影響している。

2. 目的と取り組み内容

1. 観光産業人材の育成
3年生（16人）を対象に、大分県のを主題に、ガイドの育成を行う。
土地の魅力を自ら発見し、英語・観光資源を用いた観光案内を作成することで観光産業人材の発掘・育成に繋げる。
あわせて、インバウンドにも対応できる観光産業人材の発掘・育成を図る。
2. 大分県内の魅力ある観光資源の発信
作成した観光案内（記事、動画等）の発信情報を作成する。作業時には地域の協力を得ることにより、より信憑性、客観性のあるものを検討していく。
3. 多言語プレゼン能力の向上

3. 撮影場所

撮影場所は、大型バス4台で、ある程度まとまっていける分類、場所から、下記とした。

クラス	撮影場所
1	大分駅周辺 大分駅周辺 海岸駅周辺 春日浦
2	温泉郷 竹瓦温泉
3	温泉郷 竹瓦温泉
4	竹瓦温泉郷

4. 撮影時の機材

撮影に当たって事前に、「撮影機材とは？」について、撮影会の開催前、また、ツーリズムおおいたの三浦様による講演会を大分工業で開催。

	誰が必要	申請先	使用は不要
人物	個人が機材に特定できる	―	撮影の背景にて、機材が写り込んだ
	自身の顔出し、お客さん		年齢が分かっても人物が特定できない
対象	背景さん、道具さん、看板	本人	体の一部で本人の特定ができない
	看板（実名、nake）	対象	
	看板地図	対象	会社名、商品名、ロゴが見えない
	商品	対象	

5. 撮影の様子

撮影時の注意事項説明

地元の人からの情報収集

現場の方から商品の説明受け

お寺様の撮影

6. 最終発表会

日時　令和6年12月18日（水）
場所　大分県庁
参加者　3年生160名
　　各3グループから事前に選ばれたグループの最後上演
審査員　大分県庁　　校長、主事、3年の先生、関係企業
（11名）　大分県　　観光協議課、学事、紀平参事、ツーリズムおおいた様
　　スペイン　デウスト大学　Dr. Alejandro Lopez Garcia

動画の要点
項目と配点

評価項目	グループ名	得点
ビジュアルメッセージ（撮影とデザイン）		5点満点
身体的メッセージ（動作と表現）		5点満点
スピーチメッセージ（英語によるスピーチ）		5点満点
アピール力（インバウンド誘致を目的）		5点満点
総合点		20点満点

7. アンケート結果

Q.この活動を通して、大分が好きになったか？

Q. 自身の英語が伸びたか？

Q.授業の一環として取り組むことはどうだったか？

Q.プレゼン以外に身についたことがあったか？

8. 終わりに

◆今回、2年生160名という大人数での活動であったこと、観光地へ日向く際の安全上の配慮など、教員としても初めてのことが多く、試行錯誤しながらの活動であった。
◆アンケートの結果からも、当初の目的は概ね達成できたと考えている。
◆最後に、大分県の観光者、ツーリズムおおいた、中小、商業六関係者の皆様に感謝申し上げます。

事業の様子の動画をページ上部のQRコードからご覧になれます

青の洞門周辺を基軸とした本郷馬渕の観光振興

別府溝口学園短期大学　食物栄養学科　准教授　安達 美枝子（観光・温度）　准教授　江島　陽子（長）

本郷馬渕町の観光化の可能性と集客力アップを探る

別府溝口学園短期大学　食物栄養学科　2年生
髙橋 瑞希　木村 結衣　川野 朱音　白石 万紗
指導教員　安達 美枝子　　准教授　江島 陽子

食物栄養学科の栄養士を目指す学生が
課題解決に取り組む

＊実施期間：2024年度　＊2025年度継続予定

大学連携で期待すること

◆そばを活かした観光振興
◆若い学生の視点から見た本郷馬渕観光の魅力発掘
◆地域住民を巻き込んだ持続的な取組み
◆ＳＮＳを活用した観光ＰＲ
◆本郷馬渕のファンを創出し、関係人口増につながる取組み

目的・取組み

◆目的：
若い世代に本郷馬渕のことを知ってもらい、観光客の増加に繋げるため、本郷馬渕支所と協働して、青者を対象とする集客力のアップを目的とした。

◆取り組み
①「道の駅郷戸トピア」周辺の観光の魅力探し
②「そば」を使った商品開発
③幼児・小・中学生を巻き込んだ「地域の宝さがし教室」実施
④インスタグラムを活用

研究実施日程・活動の様子

4月：学生×本郷馬渕支所との意見交換及び協議
5月：本郷馬渕町の現地調査フィールドワーク
郷戸そばを材料にしたメニューの考案・試作
6月：フィールドワークから見える本郷馬渕の魅力の整理とレシピ開発
そば関連官能検査（郷戸トピア協賛）
そば入りのかるあげ・団子の試作及びそばの特徴探索３回
中津市の観光及び施設アップフィールドワーク
そばんこ団子及びそばコーヒーテ試作

7月：道の駅「郷戸トピア」を拠点とした観光に関する現状研究と地域住民を巻き込む持続的な取り組みについての協議
本郷馬渕の観光ワークショップ参加（中津市役所本郷馬渕支所）
今後のスケジュールの共有とスケジュール確認
8月：中津市立本郷馬渕中学校　講話
（食物栄養学科1年生2名・中津市役所職員・大分県教育委員会）
9月：イベント「地域の宝さがし教室」実施　インスタグラム活動開始
10月：イベント「地域の宝さがし教室」実施　インスタグラム活動開始

３つのアンケート調査結果より（一部抜粋）

本郷馬渕の「魅力」「強み」

結果 Ontoyo-商品、そばの考案メニュー他

まとめ・今後の課題

◆本郷馬渕町及び周辺の観光を知ることで地域の良さを学生自身が発見し自分のことのように取り組むことができた。
◆本郷馬渕町の特産品である「そば」の消費拡大のためにレシピ開発や、イベントを通じて地元の中学生や地域の方々と郷戸レシピの試食や本郷馬渕の良さの意見交換を実施し交流ができた。
◆アンケート調査を行うことＳＮＳからの情報を得ると捉えインスタグラムでの発信を行うことができた。
◆今後は、①“そばの考案メニュー”を商品化及び食品衛生法本学のあい学生たちが本郷馬渕町の現地観光をモニターしモデル事業の提案等を実施する。

令和６年度市町村課題解決事業
「ブロンズ像メンテナンス技術習得」

担当者　教育学部准教授
村上祐介

1．事業の目的

本事業は、大分県竹田市と本学教育学部村上研究室が連携し、竹田市内に点在するブロンズ像のメンテナンス（保存修復）の知識と技術を、竹田市内の事業者に実地講習を通して伝えるものである。市内の事業者がメンテナンスの知識や技術を習得することで、竹田市の財産ともいえる、帆倉文夫や渡邊長男らの屋外彫刻を、良い状態で後世へ受け継ぐことが期待できる。

2．メンテナンスの方法

ブロンズ像メンテナンスの手順としては、大きく分けて《洗浄》と《ワックス塗布》の工程がある。

まず《洗浄》では水で希釈した非イオン系洗剤を、大き目のブラシに付け、表面全体を洗浄する。その後、細かいブラシ（歯ブラシやナイロンブラシ）を使用し、凹凸部分や隙についた、粉塵や虫の糞などを取り除いていく。その後、水で十分に洗い流し、ウエスで拭き上げ、天日にさらして十分に水分を飛ばす。

その後の《ワックス塗布》の工程では、溶剤で溶かした蜜蝋を、刷毛で像全体に２～３回塗っていく。緑青（錆）が強く出ている部分には念入りに塗り、十分にワックスを染み込ませる。ワックスが塗布された像は、全体的にマットな仕上がりになるので、その後ウエスで部分的に磨いて光沢調整を行うことで、彫刻本来の輝きを出していく。

【メンテナンス前の作品】

【洗浄の様子】

【メンテナンス後の作品】

3．事業成果

本事業を通して、複数の業者に実地指導を行い、屋外ブロンズ彫刻の保存修復の技術と知識を伝えることができた。今後も当が中心となり、竹田市の事業者がこのメンテナンスの方法を習得することで、竹田市内の多くの彫刻が美しい状態で維持されることになれば、街全体の美化だけでなく、作品への愛着形成といった、そこに住む人々の意識の変化に繋がることが期待できる。

No.24 移住定住動画作成プログラム事業

おおいた地域連携プラットフォーム／コーディネーター　和田　賢治

令和６年度移住定住動画作成プログラム事業 in 宇佐市（※）

協働：おおいた地域連携プラットフォーム　協働教育部門　コーディネーター　和田智治

【事業概要・目的】

都市圏の移住・定住希望者へ向けて、地域の魅力をＹｏｕＴｕｂｅで紹介する動画を学生視点で作る

→地域の生活資源の魅力を掘り起こす。　→暮らす、働く、遊ぶ、学ぶ、触れ合う

→市役所・役場が実施する

きっかけは、自治体が実施する公務員のキャリア形成プログラムではあるが、これを通じて、地元出身（＋α）の学生に地域の魅力を再発見してもらうことである。取材をしていく中でその地域と学生の接点を作る。自分が生活できるイメージを養うことを目的とする。

一方、都市圏からの移住定住者の獲得ツールとして活用できるレベルのものを成果として提供する。

【参加メンバー】

公立諏訪アジア太平洋大学　アジア太平洋学部３年生１名，１年生１名

大分大学　経済学部　１年生２人

日本文理大学　工学部　１年生１名

【取材協力者】

日本文理大学　工学部　教授　小島　勝宏

日本文理大学　工学部　教授　中村　嘉彦

大分大学　地域連携プラットフォーム総括機関　和田　智治

【宇佐市職員】

宇佐市役所　まちづくり推進課　課長　小木　永悟

まちづくり推進課ふるさと支援係　主幹兼係長　江口　義之

まちづくり推進課ふるさと支援係　主事　佐藤　博紀

【事業プロセス】

＜令和６年度成果＞

宇佐市移住定住促進ビデオ（インタビュー編：佐藤さん）

https://youtu.be/oZ0dF5m30Ec

宇佐市移住定住促進ビデオ（インタビュー編：古口さん）

https://youtu.be/wcDRnIQQL4

宇佐市空き家バンク利用促進ビデオ

https://youtu.be/RVCCuQnrLnA

※令和５年度：中津市本耶馬渓支所

令和４年度：臼杵市役所でも同様の実績あり

宇佐市派遣職員からのコメント

今回の事業は、当市の移住定住支援の課題の一つである「移住後のイメージの明確化」を目的としておりましたが、学生ならではの柔軟で新しい視点が光り、非常に充実したものとなりました。制作過程では、学生たちが真剣に意見を交わし、撮影や編集に取り組む姿が印象的でした。完成した動画は、学生らしさが存分に詰まった、移住希望者に身近で、伝わりやすい内容になりました。

動画は市公式YouTubeや移住者説明会で活用していきます。この度はありがとうございました。

SDGs 日本文理大学

地域の竹林整備と竹活用事業のさらなる自主財源の確保に向けて

日本文理大学　保健医療学科　臨床医工学コース　小野寺博和　，張力敏男　土肥紀幸
修士学生　臨床医工学コース2年　大立麟祐，青木雷記，青木涼介，鈴木海帆，松岡亮也，柳田朱里，矢野七帆，吉田佳子
公民館と長岡市議会

目的：竹を利用した酵素風呂の科学的な効果検証実証と安全な利用のための調査を通し、より一層の竹の有効活用と環境保全活動を更に進めることを目指す。

◇実施期間：令和6年9月～令和7年1月
◇実施場所：公民館と長岡市議会
◇ワークショップ　令和6年9月19日、26日

実施内容

①竹の酵素風呂自体に抗酸化能があるかについてのデータ測定

酵素浴剤（竹パウダー＋米ぬか＋発酵）に含まれているビタミンEに注目して抗酸化能の測定を行った。
酵素浴剤（竹パウダー＋米ぬか＋発酵）からの抽出物及び酵素浴剤直接接触による抗酸化能（O_2の還元性）の測定を実施した。
結果：60%エタノール抽出液では竹パウダーからの抽出液の抗酸化力が高い結果となり、含有されている抗酸化物質としては、竹パウダーが多いことが明らかになった。
一方、酵素直接接触による溶液量での抗酸化力は、酵素浴のサンプリング先は酵素浴剤が有意に高い抗酸化力を示した（図1），実際の酵素浴においても皮膚接触で抗酸化作用を示す可能性が明らかとなった。

図1　粉末溶液接触での抗酸化力

②竹の酵素風呂の入浴前と入浴後のひとさじ湯での血流量の変化を測定

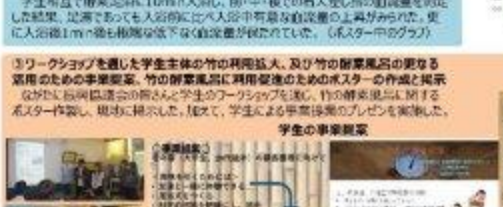
約70℃に保温酵素浴による安全性の確認と自行改善の可能性を検討するため、レーザー血流量の測定を行った。
・サービスで全身浴での入浴前後の血流量測定
酵素浴入浴の体験サービスの一環として、同意された顧客を対象に、血流量の測定を実施し、その結果をプリントアウトし提供した。結果をまとめると入浴後に比べ、入浴後15分程度後でも有意な血流量の上昇がみられた（図2）。ただしこれに伴う極端な心拍数の変化や顔面蒼の変化はなく、安全に入浴できると考えられた。
・新規提案の足湯（10min）での血流量測定
学生用置で酵素足湯に10min入浴し、前・中・後での計入浸し指の血流量を測定した結果、足湯であっても入浴前に比べ入浴中有意な血流量の上昇がみられた。更に入浴後1min後も極端な低下なく血流量が維持されていた。（ポスター中のグラフ）

図2　酵素浴前後の血流量

③ワークショップを通じた学生主体の竹の利用拡大、及び竹の酵素風呂の更なる活用のための事業提案、竹の酵素風呂に利用促進のためのポスターの作成と掲示

公民館と長岡議会の皆さんと学生のワークショップを通じ、竹の酵素風呂に関するポスター作製し、現地に掲示した。加えて、学生による事業提案のプレゼンを実施した。

学生の事業提案



学生の作成のポスター例

結果とまとめ

竹の酵素浴の抗酸化力を測定し、竹パウダーの有効性が示された。従来からある米ぬかのみの酵素浴との差別化が可能となった。
併せて、酵素浴による血流量の増加がみられることより、自行の促進が得られ、安全な入浴ができると考えられた。
学生の事業提案にもあった足湯、現場での体験に向け、今後の検討を継続する。
また、地域課題解決に向けた試みとして、学生への教育効果も得られた。

謝辞：豊栄入野市役所　まちづくり推進課　古庄美之氏、江戸鈴夢氏に多大なご支援・ご協力いただきました。感謝いたします。

学校外における教育活動への参加の機会に対する地域格差の解消と教育力向上を目指したメタバース活用事業

大分大学／教育マネジメント機構 STEAM 教育推進センター　教授　竹中　真弟子

事業の様子の動画はページ上部のQRコードからご覧になれます

県産未利用食材資源を用いた新規調味料開発

大分工業高等専門学校／一般科　准教授　森田　晶平

事業の様子の動画をページと紙のQRコードからご覧になれます

新潟治・ウェルネスツーリズム推進に係る若年層への波及について

別府大学／国際経営学部　講師　小野　貴史

2024年度県内企業等と県内大学等の連携による地域活性化事業

令和6年度大分県地域連携プラットフォーム機能強化事業賞「企業と県内大学等の連携創出支援事業」　成果発表報告会

新湯治・ウェルネスツーリズム推進に係る若年層への波及について

別府大学 国際経営学部国際経営学科　講師：小野貴史
学生：大野愛恵理 藤本琢也 伊藤文翔 時平琢己 川光みら乃 木田恵梨香 久保拓登 小林風馬 佐藤拓洋 森 彩
志賀亮介 重永昇吾 横本優真 筑潤 凌 藤井秀志 村田海渡 山下秀世 迫崎春輝 小川雄大 森 荘汰

1.地域課題

2. 事業目的と取組内容

3. 活動スケジュール

4. まとめ（報告会）

事業の様子の動画もページ上部のQRコードからご覧になれます

オリーブオイル搾油残渣の資源としての有効活用

別府溝部学園短期大学／食物栄養学科　教授　牧　昌生

オリーブオイル搾油残渣の資源としての有効活用

提案者　imaアグリサービス

連携大学　別府溝部学園短期大学　食物栄養学科

教授　牧 昌生　　助手　児玉 真由美

背　景

課題 Problem

搾油残渣の廃棄 ・産業廃棄物

付加価値

資源として有効利用 ・パウダー化 ・分析調査

商品開発 ・市場調査 ・食品開発など

課題を解決するための5項目

	項目	内容
1	原材料への加工（パウダー化）	廃棄物から資源への利用
2	市場調査	商品化の優位点
3	化学分析調査	資源としての活用幅の拡大
4	残留農薬調査	資源としての安全性の検証
5	商品開発（Recycle）	SDGs持続可能な産業

実施項目

成果 result

オリーブ果実搾油残渣

産業廃棄物　　トレーサビリティ

↓

搾油残渣の有効活用

乾　燥　　粉末化

↓

搾油残渣の商品開発

SDGsとして持続可能　　特産品の開発

成　果

今まで産業廃棄物として処分することで、処理費用のマニュアルの管理が必要であった。この事業で搾油残渣が有効活用される。搾油残渣含んでいるオリーブ搾油残渣を乾燥・粉砕処理する搾油残渣を資源とすることができた。パウダーとすることで保湿性・取り扱い性が良くなることや食品原料化、練り・石鹸など多方面の商品開発を検討することもできる。また、分析結果より食品原料への安全性が確認された。事業で搾油残渣からオリーブ料理・商品化に貢献し、関係機関などとコメントを得ることができた。搾油残渣の付加価値を作ることで、搾油残渣の資源有効活用が進み、SDGsとしての持続可能な産業として社会へ広めることが期待できる。

そして、パウダーとしたオリーブ果実搾油残渣は様々な用途と多様な商品開発に活用できることから、多くの業界に商品開発・販売の機会が提供されると考える。

事業の取りくみ動画もページと連動QRコードからご覧になれます

フィールドワーク支援事業のひとこま

フィールドワーク支援事業

集計

地域連携によるSTEAM教育ワークショップと指導者の育成

●スキルが身につき実践で活かせた。多くの場でワークショップを開くことができた。
●教員になった時にも役に立つ内容であった。

地域の生活・仕事創造から学ぶ地域つなぎプロジェクト

●学生でありながらイベントまで開けられて地域の活性化に貢献していたと思う。
●地域を見る新しい視点を学ぶことができた。
●実際に地元の人に会って取材を行って解決策を出すことによって地域問題に対して興味を持てた。

小鹿田焼の里における地域活性化プロジェクト

●大学関係者での宣伝やSNSの活用で、若者に対し小鹿田焼の魅力を発信することができた。
●フィールドワークに参加することで、調べるだけでは知ることができない陶人さんの本音や、日田・小鹿田焼の魅力を知ることができて、この経験をもって地域活性化に繋げたいと考えています。とても良い機会になりました。

佐伯市大入島イノベーションプロジェクト
～地域活性化のアイデア創出と その実践に向けて～

●持続的に地域活性化に向けた支援を目指すできあり、SNSやITなどの活用も積極に入れた支援策を目指していくべきだと感じた。
●私は大分県内で育ってきましたが、大入島に行ったのは今回の活動が初めてでした。その中で実際に島の方々と触れ合い、皆さんが大入島を愛されているということを感じました。そして、だからこそ皆さんが活性化に貢献できることとして何があるか、と改めて考えるきっかけにもなりました。

杵築城下町 夜間景観向上ワークショップ

●若者がイベントに参加して、地域の方の声や参加されている様子を直に体験することができた。そのおかげで、はきくの方が作品や体験するのを見て喜ばれていたり、感動していただけたりしていました。普段の日常から非日常へと導くことができた。地域の新たな魅力の創出に貢献できたと思いました。
●現状での参加者が分からないことも多かったですが、今のままいくのにどうしたらもっと良くなるだろうかなど、細かい部分まで考えるようになり、改善していく必要があり、地域活性化のための取り組みですが、私たち自身も成長させられる取り組みでした。

外国人住民との共生社会実現に向けたモノづくり・コトづくりプロジェクト

●その地域に住み働く人たちの声を聞き情報を得ることで、どのような課題がありそれに対して今ある動や状況でどう対応できるか、地域に寄り添った考えを学び実践できたのでかなり貢献できたと思う。
●地域のリアルな知る機会があるが、簡単な問題ではないと改めて知ることができた。今後も大学生が地域に深く関わっていくべきだと思う。

梨の葉を利用したお茶の製造

●地域で新たにアピールできるものを考えて、それがどのような効果があるのかを話で考えたことで地域活性化の理解が深まった。
●農家に対しないものから地域貢献につながる発見があって面白味を感じた。

中津市本耶馬渓地域の観光業者に係る課題解決に向けた体験型サービスの開発

●若々大学生の目線から今の若者や女性が求めるものを考えたうえで企画を行い、中津の方々との交流の場を生み出せた。
●地域の魅力を伝える活動や楽しさ知ることができて良かったです。

オリーブ栽培農園のも次産業化をめざして～オリーブ不良果実を利用した商品の開発～

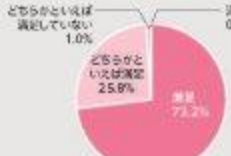
●オリーブの課題を知り、解決策を考えたと思う。
●チュイールはとてもおいしかったので実際にもっと販売してお客様の反応を聞いてみたい。他にも何か作れるか検討してみたい。

本耶馬渓の観光地総事業（温泉・観光・食）　道の駅 耶馬トピア！周辺の観光化の可能性と集客力アップを図るフィールドワーク支援事業

●多くの人たちと関わることで様々なことについて学び、理解することができ、それを地域の人たちや、その他の人たちにも共有することができ、より地域の魅力を伝えることができたと思った。
●その地域の方々の思い を知り、地域の活性化についてより興味がわいた。

Q. 出身地はどこですか？

Q. 事業に参加しての満足度は？



参加学生等アンケート

結　果

Q. どのような目的(動機)で参加しましたか?

Q. 地域への理解は深まりましたか?

被災地域住民の防災やコミュニティに対する意識の変化と健康状態の調査

●東平地区のもつレジリエンス力について、調査や資料を通じて地域に公表することで、人々に同地域へ関心を持っていただけるように努めました。また住民の皆様にも成果をフィードバックすることで、地域の強みや課題について共有でき、今後の防災に繋がる取り組みになったと考えます。
●地域の実情を誇り知っている住民の皆様に被災経験や その後、コミュニティなどについて聞く機会はとても貴重であり、今後の学習や研究に活かしていくきっかけになりました。

湯治ぐらし～薬膳料理ゆたかな食生活を通じたwell-being向上プロジェクト

●温泉とシェアハウスを掛けた事業の形態を聞いたり、体験ゆりの体験をすることで、地域を活性化させるための手法を知り、新しい視点が増えたと感じた。
●ワークショップを通して、自分のやりたい若者の視野とよく聞いた考え方、暮らしをしていくためのプロジェクトを提案することができた。

ノルディック・ウォークを用いた健康寿命の延伸と地域の担い手づくり事業

●地域づくり、コミュニティづくりの技法や協業点を学ぶことができた。
●地域の問題・課題を学ぶだけでなく、地域人たちが育んできた文化や価値に触れることができた。

大分県内 国宝指定 史跡等における外国人対応について 調査および調査用に関する 必要な英語の表現集(英語マップ作り)(調査用語・調査用に活用できる使い方の確認)

●プログラムシンプという初めての経験を時間内 地域貢献に携わってやりがいを感じた。
●台湾色以外の地域の現場に実際に向かい合うという貴重な機会になった。

大学生認知症サポーターによる共生社会実践プロジェクト

●医療者側としての考え、地域住民としての考え、認知症の人の考え、認知症家族の考えなど、様々な人の意見を聞くことができた。その人達の思いや現状を知ることによって今後のケアに活かすことができる。
●様々な活動を通して、認知症に対しての理解を深め、それらをどのように活動に繋げていく必要があるのか考えることができた。新しい発見や、地域活動の楽しさを改めて感じることができ、今後の看護実践にも活かしていきたい。

別府明礬地区にて生産される「湯の花」の地球化学的資地調査

●様々な現代を学ぶことができた。

地域活性化に向けたオープンデータを活用する「まちあるきアプリ」の作成

●地域のまだ開発されていない魅力を見つけるための視野が少し広がった。
●地域のひとの動きおきを通して、地域に関しては前より興味を持つことが出来た。

文化財保存・継承と観光活用プロジェクト ～戦後60年に向けたピースツーリズム～

●平和関連施設などを巡って、地元の戦争の歴史を深く知れた。また、ピースツーリズムがどういったものかを実感できた。
●観光を通して、地域の平和について学ぶことができた。私たちが知れた文化財や施設などが次の世代まで保存や継承されるようにしたいと思った。

地域文化財と大学博物館を活用した人材育成 ～小学生を中心とした地域の歴史探訪と体験教室を通して～

●子供たちに文化財に対しての理解と興味部について知ってもらうことができた。
●地域の歴史について知ることができた。とくに、小学生に教えることで、地元への愛着がわくような取り組みだったと思う。

～がんサバイバーの"食べたい"を叶えるメニュー開発～ Cocoro Support Project

●食べやすくておいしい料理について 開発や試食会を実施して、がんサバイバーのかたちの食に対する意見や事業を聞くことができたこと は、今後の私たち学生の活動につなげることが出来たと感じた。
●がんサロンに参加したことは大きな学びになった。これからもさまざまな体験を通して成長していきたいと思う。

亀川商店街再活性化計画策定事業(財)

●この講座を通じて、これまで学べることのなかった起業等について知識等を得たことで、起業についての関心が高まりました。
●企業の方や会社の方を招いての講座や、グループプロジェクトを通して、プロジェクトの企画やその方法について学ぶことができて大変参になりました。

2024年度　地域の課題解決事業成果

「おおいた地域連携プラットフォーム」を通じて取り組んだ「フィールドワーク支援事業」（21件）、「大分県と県内高等教育機関との連携による地域課題解決事業」（3件）、「県内企業等と県内高等教育機関の連携による地域課題解決事業」（5件）の2024年度の取組を、WEB上でのオンデマンド配信の形で公開しています。

事業番号 ❶

事業番号 ❷

事業番号 ❸

事業番号 ❹

事業番号 ❺

事業番号 ❻

事業番号 ❼

事業番号 ❽

事業番号 ❾

事業番号 ❿

事業番号 ⓫

事業番号 ⓬

事業番号 ⓭

事業番号 ⓮

事業番号 ⓯

フィールドワーク支援事業の審査について

「フィールドワーク支援事業」の21事業の本報告会の発表については、おおいた地域連携プラットフォーム「フィールドワーク支援事業ワーキンググループ」構成員及び各市町村職員により、「学生の取り組み内容」「プレゼンテーション力」「地域の課題解決に向けた成果」の2つの観点から審査が行われました。

審査の結果、右記の事業が上位入賞を果たしました。

（敬称略）

順位	事業名	担当教員	補助金
👑	佐伯市大入島イノベーションプロジェクト ～地域活性化のアイデア創出とその実践に向けて～	大分大学 経済学部 教授　羽廣　博子	10
👑	オリーブ栽培農家の６次産業化をめざして ～オリーブ不良果実を利用した商品の開発～	別府溝部学園短期大学 食物栄養学科 教授　牧　晶生	15

報告会　オンデマンドでの開催

配信開始後から多くの方にご視聴いただき、好評な声が多く聞かれました。
報告会で発表した皆さん、視聴いただいた皆さん、ご協力ありがとうございました。

視聴はこちらから！

事業番号 16

事業番号 17

事業番号 18

事業番号 19

事業番号 20

事業番号 21

事業番号 22

事業番号 23

事業番号 24

事業番号 43

事業番号 44

事業番号 45

事業番号 46

事業番号 47

（敬称略）

順位	事業名	提出団体	参加者数
1	～がんサバイバーの"食べたい"を叶えるメニュー提案～ Cocoro Support Project	日本女子体育大学 食物栄養科 准教授　平野　貴美	26
2	大学生認知症サポーターによる共生社会実現プロジェクト	大分大学 医学部 教授　三重野　英生	21

県内大学・短期大学等一覧

学校名	学部・学科・コース等			令和7年度入学定員(人)
大分大学	教育学部	初等中等教育コース		140名
		特別支援教育コース		10名
	経済学部	総合経済学科		270名
	医学部	医学科		100名
		看護学科		60名
		先端医療科学科	分子医療科学コース	20名
			臨床医工学コース	15名
	理工学部	理工学科	数理科学プログラム 知能情報システムプログラム DX人材育成教育プログラム 地球環境プログラム 電気エネルギー・電子工学プログラム 機械工学プログラム 知能情報システムプログラム 化学・物質化学プログラム 物質情報科学プログラム 建築学プログラム	395名
	福祉健康科学部	福祉健康科学科	福祉学コース	30名
			社会福祉実践コース	35名
			心理学コース	35名
	大学全体			1,110名
大分県立看護科学大学	看護学部	看護学科		80名
	大学全体			80名
日本文理大学	工学部	情報電気工学科	未来創造工学コース 先端ものづくり設計コース 電気・制御システム総合コース	60名
		建築学科	建築設計コース 住居・インテリアデザインコース 建築工学コース 環境・地域創生コース	80名
		航空宇宙工学科	航空機・総合工学コース スペーステクノロジーコース エアライン整備・オペレーションコース	40名
		情報メディア学科	情報工学コース メディアデザインコース 情報コミュニケーションコース こども・情報教育コース	100名
	経営経済学部	経営経済学科	ビジネスソリューションコース 地域マネジメントコース 会計ファイナンスコース スポーツビジネスコース こども・情報マネジメントコース	300名
	保健医療学部	保健医療学科	診療放射線学コース	80名
			臨床検査学コース	50名
			臨床医工学コース	30名
	大学全体			740名
別府大学	文学部	国際言語・文化学科		80名
		史学・文化財学科		100名
		人間関係学科		70名
	国際経営学部	国際経営学科		100名
	食物栄養科学部	食物栄養学科		60名
		健康食品学科		60名
	看護学部	看護学科		80名
	大学全体			640名

令和7年1月現在

学校名	学部・学科・コース等	令和7年度入学定員(※)
立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部（APS）	510名
	国際経営学部（APM）	610名
	サステイナビリティ観光学部（ST）	350名
	大学全体	1,470名
大分県立芸術文化短期大学	美術科	75名
	音楽科	65名
	国際総合学科	100名
	情報コミュニケーション学科	100名
	大学全体	340名
大分短期大学	商学科	40名
	大学全体	40名
東九州短期大学	幼児教育学科	40名
	大学全体	40名
別府溝部学園短期大学	介護福祉学科	35名
	食物栄養学科	40名
	ライフデザイン総合学科	75名
	幼児教育学科	50名
	大学全体	200名
別府大学短期大学部	食物栄養科	40名
	幼児教育科	200名
	大学全体	240名
大分工業高等専門学校	機械工学科	40名
	電気電子工学科	40名
	情報工学科	40名
	都市・環境工学科	40名
	学校全体	160名
大分県立工科短期大学校	機械システム系	30名
	電気・電子システム系	30名
	建築システム系	20名
	大学全体	80名
放送大学大分学習センター	教養学部　教養学科	—
	大学全体	—
合計		5,040名

※30人学生を除く

■お問い合わせは

おおいた地域連携プラットフォーム

協働事務局事務担当：大分大学地域連携プラットフォーム推進機構
https://oita-platform.org
〒870-1192 大分県大分市大字旦野原700番地
TEL 097-554-7913　FAX 097-554-6177
cocsuishin@oita-u.ac.jp